『異常ー桜井ニノちゃんの憂鬱』

相澤 辰弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『異常ー桜井ニノちゃんの憂鬱』

【Ｎコード】
Ｎ７７３１Ｗ

【作者名】
相澤　辰弘

【あらすじ】
めだかボックスの球磨川さんが好きだったから二次創作を書いてみた。反省はしてる、後悔はしていない。

以下、作品紹介。

この物語はバッドエンドである。

気付いたらアテネのパルテノン神殿が復元したらこんな感じかなぁというところにいて、目の前にはなんかよくわからんが羽が六枚生えた金髪のキレーなねーちゃんがいました。ちなみに貧乳↑ここ大事

何時の間にか死んでいた俺をなんか生き返らせてくれるらしい。マジかよ。

強くてニューゲームは何だかんだ言ってわくてかものだが、零歳児からスタートはなんだか怠いな。それに特に生き返りたいわけでもないし。

そんなこと言ってたら強制転送？されますた。

無事に普通の家庭に生まれて普通に育って普通に親が好きで、そして普通に病院に連れて行かれた。そこで黒神めだかと球磨川さんに出会ってここがどこか理解↑今ここ

というわけで病院で診察を受けるところから本編スタート！

「そんな能力で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

これは二次創作なので、原作が好きな方は全力でバックして下さい。

幼児が饒舌に喋る姿はそれだけで異様。（前書き）

めだかボックスの二次創作を書こうとして失敗した。反省はしてる。
後悔はまだしてない。

幼児が饒舌に喋る姿はそれだけで異様。

神の如く

姿さえ見せない

俺は今まあまあ大きい病院のまあまあ大きい診察室でまあまあ小さい先生から診察を受けていた。

え？　何言ってるかわからない？

ゴメン、俺もわからない。こんな時、どういう顔をしたらいいかわからないの。

「笑えばいいと思うよ」

ガタガタッ！

俺の心の声に的確に返してきた目の前の先生に驚愕する。

金髪の短い髪に白衣。小学生みたいな容姿の先生の名前は人吉瞳。こんなりだがこれでも診療外科医らしい。

非実在青少年乙。

「桜井ニノ君。あなたがなんでここに連れてこられたかわかる？」

桜井ニノ。これ俺の名前ね。何故かニノってカタカナだけど、そこは両親曰く気にしてはいけないらしい。

「まあ、だいたい予想はつきますけど。出来れば外れてほしいなぁというのが本音です」

五歳でこんな受け答えができる時点で異常だとは自分でも思うけど。言ってしまったものは仕方ない。

そんなことを考えていると人吉先生は書類（たぶん俺の生年月日と身長体重血液型と検査結果なんかが書かれてる）をスチール製の机でトントン整理しながら、俺に向かって微笑んできた。

「私たちの仕事は君たちみたいな普通とはちょっと違った子がちゃんと社会で過ごせるようにすることなの。少し入院が必要かもしれないけど、心配することはないわ」

いや知ってます。と言いかけて慌てて口を閉じた。この場面でそんな発言したら流石に怪し過ぎる。

「入院ですか。それってどれくらいお金がかかるんでしょうか？あまり高いと親に負担をかけることになるんで、遠慮したいんですけど」

取り合えず五歳児が言わなさそうなことを言ってやんわりと断ってみた。別に五歳児のフリとかする必要性が感じられないし。

「大丈夫よ。入院にかかるお金は全部病院側が負担してくれるから。あなたは気兼ねなく入院していいのよ」

怪しい病院だなおい。ま、別にいっか。特に俺が困るわけでもないし。

「はぁ。そういうことならわかりました」

こんなこと言われて断る理由も思い当たらないから、頷いておいた。人吉先生の顔を立ててておいた、というのもある。

俺の返事を聞いた人吉先生はニコニコしながら俺の入院の準備を始めのだった。

病院のベッドに寝転がりながら思案中。何故かはウェブで。ホントは暇だっただけだ。

まさかの個室に病室は最上階。逃亡対策だと勘繰る俺はきっと嫌な子供。ま、いいや。

どうやらこの世界は週刊少年ジャンプで連載してる西尾維新原作のめだかボックスという漫画の世界らしい。二次元にダイブしてしまった。毎日パソコンに張り付いてるピザデブには夢のような体験なんだろうが、正直俺には堪ったもんじゃない。

こんなキチガイだらけの世界に飛ばされたなんて、あの羽生えた金髪のキレーなねーちゃんは一体俺に何を期待してたんだ。謎過ぎる。

ま、そんな幾ら考えてもわかるはずのない問題なんか傍のゴミ箱にダストシュートして、これから俺なにしていこうか、ということを考えようじゃないか。うん、俺って前向き。

取り合えず現状わかっていることは俺には異常（アブノーマル）か過負荷（マイナス）か、それに準ずる何かが備わっているらしいということ。そんなこと生まれ変わってから一度も考えなかったから何があるのかとかわかんね。

まあそれは追い追いわかるだろうとして、今現在この病院には黒神めだかと人吉善吉がいる。球磨川さんには残念ながら会えなかった。いや、一回会ったけどまともに会話してないし。

全然能力とか何がしたいだとか全く全然わかってない俺だが、目の前には二つの選択肢が存在する。

それは黒神めだかと人吉善吉に会いに行くかこのまま病室でじっとして何もしないか、という二つの選択肢だ。

平穏に生きたいなら後者。ちょっとスリルを味わいたいなら前者。

ちなみに前者だと世界に何が起きるかわからなくなる可能性が出る。

本来俺はこの世界に存在しない人間だ。いや、もしかしたら原作で全く描写されなかった異常や過負荷なのかもしれないが、少なくともその教室の後ろの方で友達と雑談でもしているようなモブキャラがこの病院で黒神めだかと人吉善吉に接触したなんて事実は存在しない。

それなのに俺が勝手に動いて過去が書き換わってしまったら、未来がどうなるかわからない。ブラジルで蝶が羽ばたいたら北京で竜巻起きる。いわゆるバタフライ効果ってやつだ。

だけどそんなこと気にしてたら俺は大抵のことができなくなる。だって俺存在自体がイレギュラーだし。

それに世界が変わる様を見てみたいというのもある。所詮この世界は俺にとって漫画の中の世界でしかない。なら、多少のことはしてもいいんじゃないか。

そんな思考が浮かぶ。

元が漫画だからだろうか、この世界は酷く色がないように見える。その世界に色を取り戻すのにもちょうどいいかもしれない。

というわけで、託児室前まで来てみた。ちなみに人吉先生には善吉に会いに行くと伝えて来た。球磨川さんみたいに驚かれなかったから、たぶん俺は過負荷とかじゃないんだろう。ま、別にどっちでもいいけど。

託児室のドアをノックする。部屋に入る時は二回ノック。これ基本ね。

「入っていいぞ」

ドア越しに尊大な幼女の声がくぐもって聞こえて来た。たぶん黒

神めだかだろうな。

黒神めだかからお許しも得たので、遠慮なく入らせてもらうことにする。

「ちーっす、三河屋でーっす」

ガチャ、とドアを開けての第一声に三河屋をチョイスする俺。この世界でサザエさんでも広めていこうか。

「ここは磯野家ではないぞ」

と、振り向き様に俺に言って来たのは、黒っぽい短い髪にパーツの一つ一つが恐ろしく整った薄いピンクの服を着た幼女――黒神めだかだった。

ツッコミもさることながら、ていうかこの世界にサザエさんってあったのね。ま、エヴァンゲリオンとかプリキュアとかあるんだからあってもおかしくないか。

「そーでしたね。ま、三河屋なんてのは冗談で、俺入院してて暇だからここに遊びに来たわけよ。いかにも幼児らしいだろ？」

言った後さすがにこれはねーわと自分でもちょっと引いた。

「いや、その台詞は全然幼児らしくないと思うのだが」

「そう？　ま、別にどっちでもいいけど。ところで君たちの名前を教えてほしいな。じゃないとなんて呼べばいいかわからないじゃないか。便宜上キュアパッションとでも呼べばいいのか？」

後ろ手でドアを閉めながらそんなことをのたまってみる。もちろんキュアパッションなんて呼ぶ気はない。言ってみただけだ。

黒神めだかは「キュアパ……？」みたいな感じで首を傾けていたが、その側でルービックキューブを弄くり回していた人吉にそっくりな金髪の男の子が元気な声で自己紹介してきた。

「ぼくは人吉善吉って言うんだ。よろしくね！」

「よろしく。で、そっちは？」

正直自分でもなんて白々しい奴なんだと思いながら名前を促す。相手の事を知ってるとはいえ、まだ自己紹介も済ませていない状態なのだから仕方ない。

「黒神めだかだ。よろしくな」

「よろしく。早速だけど俺も入れてくれないか？　ここでずっと立ってるのも疲れるし」

そう言って四角い託児室の中央付近で座り込んでいた二人に近づいた。

これで未来に何が起きるかわからなくなったわけだが、この程度じゃ何も起こらないかもしれない。

それではつまらないし、俺の世界も変わらない。もっと劇的な変化が必要だ。

ま、それは追い追い考えるとして今日のところは接触しただけでよしとするか。これ以上何かするのもメンドクサイし。

「じゃあ俺もルービックキューブやるから、善吉勝負しようぜ」

「よぉし、まけないぞ！」

「待て、私もやるぞ！」

さて、これから先どうなるか楽しみだね。世界が変わるのか変わらないのか。バタフライ効果なんてなんて実際に起こり得るのか。

なんとも期待値の高い実験だ。

,

幼児が饒舌に喋る姿はそれだけで異様。（後書き）

次の話で主人公の性格というか雰囲気がガラッと変わります。ご注意下さい。

めんどくさいから中学校まで飛んでみた。（前書き）

お前ら俺のこと男だって思ってただろ。

実は女なんだよ。何故か。

というわけで、両親に一人称を矯正された結果一人称が「ぼく」に変わった。

全く、これじゃあ音が安心院さんとかぶるじゃないか。

ま、別にどっちでもいいけど。

めんどくさいから中学校まで飛んでみた。

はいこんにちは。皆のアイドル桜井ニノでございます。嘘です。

今現在ぼくは中学一年生。あれから八年くらいかな？　ま、年数なんて特に重要じゃないんだけども。

あの後取り合えず黒神めだかを過負荷に変えてみようと五回くらい球磨川さんみたいなことをしてたんだけども、結果は全部失敗。善吉が万能過ぎて笑えてきたところで止めた。

それなりに仲は良かったから嫌われてはいないよ。内心でどう思われていたのかは測りかねるところだけども。善吉とかはたぶん忘れてんじゃね？

ま、別にどっちでもいいけど。

その後に志布志飛沫と蝶ヶ咲蛾ヶ丸にも出会った。志布志飛沫とかいきなり釘バットで殴って来るから慌てて逃げ帰ったよ。ホントに困る。

その二人をただの異常に変えてやろうと根気良く話とかしてみたんだけど、結局志布志飛沫が「致死武器（スカーデッド）」の派生？　みたいな「憎（バズ）ーカーデッド」

武器」で病院を壊して行ったから、これも失敗。

なんだろうな。過程が違っても結果は同じなのかもしれない。決定論……とは、またちょっと違うか。過程が変わってるわけだし。

これはあれだな。シュタインズゲートの世界線の収束ってやつか。よくわからんけど、それが一番近そうだな。

まあでもどこかに未来を変えるターニングポイントがあるはずだから、そこを見極めてしっかり抑えないといけないな。

ちなみにぼくが入学したのって箱庭中学なんだよね。黒神めだかと人吉善吉の二つ上で、それはつまり球磨川さんと安心院さんと同級生ってこと。

ぼくの能力なんてのはどうでもいいだろう？　あんまり日常生活で使うようなものでもないし。使おうと思えば使えるけどね。どうでもいいや。

そんなことよりも、やっとぼくは球磨川さんに会えるわけだ。八年も待ったぜ、八年も。

入学式の時に凄く気持ち悪がられてる奴がいたから、そいつが球

磨川さんなんだろうな。入学式って言っても、今日が入学式なんだけどね。後で行ってみよう。

相変わらずぼくの世界には色がない。安心院さんが「欲視力（パラサイトシーイング）」なんかでぼくの視界から世界を見たら、ぼくのことを「悪平等（なかま）」だと思うかもしれないな。そんなことはないんだけどね。

ま、別にどっちでもいいけど。

先生の話が長いからぼくは寝るよ。いきなり教室から出て行くほど不良ではないつもりだし、先生の話を全部きっちり聞くほど優等生のつもりでもないわけだし。

はい、おはよう。もう昼だけど。別にどっちでもいいよね。

ぼくのクラスに黒神真黒なんていう妹萌えの変態がいたけど、気にしたら負けだ。ぼくは同級生で黒神真黒の妹の対象にはならない

からね。

ま、そんなことはさておき、球磨川さんのクラスに行こうかな。面白そうだし。

あーあ、世界変わんねーかな。

と、いうわけで球磨川さんの教室前に来ました。ぼくの地道な聞き込みの結果です。嘘です。

正直球磨川さんがどのクラスにいるとかは知ってました。ほら、入学式ってクラス毎に並んで座るだろ？

ショートホームルームなんていうかっこいい言い方をする帰りの

連絡伝達も当然の如く終わってたようで、ぼくは何食わぬ顔で入学したてでまだまだ固い雰囲気の教室に踏み込んだ。

そんな固いクラスの中で明らかに一人浮いてる……訂正、沈んでる奴の所まで軽い足取りで歩いて行く。どんな話をしようかとか、特に考えてはいない。ま、別にどっちでもいいよね。もーまんたいだ。

なんで大人しく椅子に座ってるのかイマイチ理解できない奴の隣に立って一言。

「好きです付き合ってください」

そのぼくの一言に教室が一気にざわつく。

そりゃそうだろう。入学式の日に教室に入って来た知らない奴がいきなりクラスメイトに告白なんてしたら、普通驚く。驚かない奴は（精神的な意味で）異常だ。

まあ、驚かないから過負荷なんだけど。

「『いいよー。これから仲良くしようね、桜井ニノちゃん』」

「おぉうふ……」

一発でＯＫとかさすが過負荷って感じ。しかもこっちに向いてすらないし。ぼくの名前知ってたし。

あ、こっち向いた。

短い黒髪に可愛らしい顔立ち。目は丸くて人懐こそうな感じだが、しかし全身から言いようのない気持ち悪さが滲み出ている。

「なんでぼくの名前知ってるんだ？これから自己紹介しようと思ってたんだけどな、球磨川さん」

「『あれー？　そういうニノちゃんこそ僕の名前を知ってるじゃないか。これは質問の対象にはならないのかなー？』」

質問を質問で返された。質問にはちゃんと答えなきゃいけないって、小学校で習わなかったのか？　ま、別にどっちでもいいけど。

「ただ覚えてただけだよ、ぼくは。忘れられないからね」

ただの言い訳だけど。事実ではある。

「『ぼくも同じだよ。あの病院で会ったことを覚えているだけさ』」

さっすが過負荷ってところか？　ぼくなんかとは比べ物にならない記憶力だね。ぼくが普通の五歳児だったら普通に忘れてるよ。

「ふーん……ま、名前なんて別にどうでもいいよね？　それよりもこれから遊びに行かない？　学校も終わったことだし、初デート行こうぜ、初デート」

「『初デートか。なんだかワクワクする響きだね。週間少年ジャンプじゃあんまり恋愛ものはやらないからドキドキするよ』」

ニコニコしながらそう言って立ち上がる球磨川さん。かっこいいよね、ホント。

「ゲーセン行こうぜ、ゲーセン。もちろんお代は彼氏持ち、だろ？」

「『あはは、酷いなニノちゃんは。そんないきなり言われたって持ち合わせがあるわけないだろ？　なんたって今日は平和な入学式だったんだからね。こういうことは事前に言っておいてほしかったな』」

そう言いながら学生ズボンのポケットから財布を取り出す球磨川さん。その財布は見事にパンパンに膨らんでいて、どう考えたって持ち合わせがないようには見えない。

「それ、どう考えても持ち合わせがないっていう財布じゃないよね。パンパンじゃないか」

「『ただの小銭だよ。ほら、小銭って嵩張るだろ？』」

「どんだけ小銭持ってんだよ」

「『全部五百円玉だけどね』」

「むしろどうやって集めたし」

そんな小学校時代からの友達みたいな会話をしながら教室から出て行くぼくたち。クラスのほぼ全員がドン引きだったけど、白黒モブキャラがドン引きしていたところで何も思うことはない。

まあ、モブキャラはモブキャラらしくモブってたらいいさ。アニメの効果音とかガヤとかくらいには役に立つかもしれないぜ？

「さて、楽しもうぜ禊くん！」

「『いきなり呼び方変わったね。が、嫌いじゃないぜ』」

あれから三ヶ月経った。いちいち時間の経過が早いという文句があるかもしれないが、そんな文句は受け付けない。

めだかボックスの世界に入れんだ。ってことはこの世界を誰かが読んでたっておかしくはないだろ？

ま、そんなことは置いといて。

禊くんとは続いてます。キスすらしない週間少年ジャンプ的恋愛ですけど。いいんじゃないのかな、別に。

相変わらず禊くんは過負荷のままで、まあ異常になってもらってもつまらないんだけどね。異常になったらなったで世界が変わったっていう証なんだろうけど、そんなんじゃぼくの世界の色は戻らないよ。

だって過負荷でも、基本禊くんは良い奴だからね。いや、過負荷だから良い奴なのかな？

ま、別にどっちでもいいけど。

あれから変態真黒くんとは仲良くなりました。小さい頃黒神めだかと遊んだことがある、って口を滑らしたら怒涛の勢いで攻め込んで来るもんだから、つい話に乗ってしまったのがきっかけだ。

まあおかげで禊くんと真黒くんが仲良くなったんだけど。

前の話の続き。ていうかずっと続く。（前書き）

話がぶつ切りなのは書き溜めてるやつを投下してるからです。いやホントにゴメンね？

前の話の続き。ていうかずっと続く。

まあそんな三ヶ月があって、今は夏休み前最後のショートホームルーム。宿題が配られたけど、中学レベルの宿題なんてタカが知れてる。だから昨日までに粗方終わった。あとは読書感想文と水彩画だけだ。

水彩画は禊くんと描きに行く約束をしたからやってないだけ。読書感想文は昔から苦手なんだ。ネガティブなことしか書けないから。

ぼぅ、と先生の話を聞き流してショートホームルームを終える。アインシュタインは時間は相対的であるって言ったらしいけど、まさにその通りだと思うね。つまらない時はホントに時間が長く感じるよ。

イラッ☆　ってきたところで漸く話が終わった。長期休みの前にはありがちな注意事項なんざ垂れ流さなくても皆知ってるって。知ってて守ってねーんだから、その辺のこともわかってやれよ。

ま、そんな愚痴はさて置いて禊くんの所に行きますか。毎回毎日迎えに行く。なんて献身的な彼女なんだろう。自分で言ってて鳥肌立った。

「真黒くんは今日どうする？　一緒に禊くんの所に行く？」

隣で宿題をカバンに詰めてた真黒くんに聞いてみる。一ヶ月に一度の席替えで偶々隣の席になった。偶々だ。別にぼくが望んだわけじゃないよ。勘違いしないでね。

「いや、今日はやめとくよ。大事な用事があるんだ」

「そんなこと言って、まためだかちゃんにウザがられても知らないよ？」

「めだかちゃんのアレはツンデレなんだよ！　この兄に対する照れ隠しさ」

「どうだか」

ぼくもカバンに荷物を詰める。詰めるって言っても筆箱しかないけどね。これって詰めるって言うのかな？

ま、別にどっちでもいいけど。

「まあ、真黒くんがそう言うなら今日はやめとくよ。せいぜいめだかちゃんに殴られないように頑張ってね。ぼくは禊くんといちゃい

ちゃしてくるから」

「不純異性交友は反対だな」

「そんなキリッとした顔で言うから思わず笑った。自分を省みてみろ変態」

そんないつものやり取りをして真黒くんと別れる。ぼくの視界の中で色が着いてる数少ない存在と別れるのは若干寂しさを覚えるけど、これから禊くんに会いに行くんだから仕方ない。

色が着いてるのは今のところ禊くんと真黒くんとめだかちゃんくらい。まあ、めだかちゃんに着いてる色は二人に着いてる色と若干意味合いが違うんだけど。

教室を出て禊くんのクラスへ行く。この三ヶ月間大した問題も起こさずに大人しく過ごしてた禊くんには驚嘆するばかりだ。

息をするように破壊活動に勤しむと噂される禊くんだぜ？　そんな彼が大人しいなんて凄いじゃないか。

ちょっと世界が変わったかな。でも、まあ収束しちゃうのかな、結果。それだったら少し悲しいな。

そんなことを考えてたら禊くんのクラスに着いた。いつものように後ろ側のドアをガラッと開けて教室に入る。毎日やるもんだから最初は注目してきたモブキャラ共も今は何も反応しなくなった。これこそマイナス成長だね。

「禊くん。一緒に帰ろーぜ」

「『ああ、うん。ちょっと待ってね。この宿題をカバンに入れるまで』」

「宿題をカバンに入れるとか、禊くんはいつからそんなに真面目になったんだ？」

「『やだなあニノちゃん。それじゃあまるで僕が不真面目な不良みたいな言い草じゃないか』」

「似たようなもんだろ。それに男はちょっと悪い方がモテるんだぜ？」

「『えー、それじゃあ僕は不良だね。宿題なんてやってる場合じゃないや』」

「一秒前の自分の発言をひっくり返すのかよ。ま、そんなところも好きだぜ、禊くん」

「『本当？　ニノちゃんに好かれるなんて不良になったかいがあったよ』」

いつもと同じような会話をしながら席を立った禊くんと一緒に教室を出る。禊くんの前は人がモーセの十戒みたいに人が分かれるけど、それって禊くんの気持ち悪さのせいかな？

ま、そんなことどうでもいいよね。

禊くんの気持ち悪さなんて今更だし、そもそも普通の人にとっては気持ち悪いのかもしれないけどぼくにとっては特に気持ち悪いとか感じるほどでもないし。表現上気持ち悪いって言ってるだけで、ぼくの主観では禊くんの雰囲気は普通の人より少し肌寒いってくらいでしかない。

つまりあまり変わらないってこと。

禊くんと下駄箱に向かいながら今日の予定を話し合う。話し合いができる禊くんに万歳。めだかちゃんとか真黒くんとか善吉くんとか志布志飛沫とか蝶ケ咲蛾ケ丸とか話聞いてくれねーんだもん。や

んなっちゃうぜ。

「今日はどこに行く？　いや、今日もどこに行く？　って聞いた方がいいのかな？」

「『んー、そうだね。ニノちゃんの家とかどう？　楽しそうじゃないか』」

そんな背筋の凍るようなことをよくもまあ言えるね。そこが禊くんクオリティってか。

ぼくと禊くんは揃って下駄箱からスニーカーを出して上履きから履き替える。

「禊くんはぼくの家庭を崩壊させたいのか？　出番のないモブキャラの皆さんの家庭ならいくらでも壊してくれていいけど、ぼくの家庭崩壊はいただけないぜ？」

「『やだなぁ、ネタにマジレスなんてしないでよね。ていうかニノちゃんがこんな話ばっかりするから話し方が移っちゃったじゃないか。責任とってよね』」

「そんなペラペラな言葉でよく言うぜ。責任とってよね、なんて言

葉はどうせなら格好付けずに括弧付けずに言ってもらいたいもんだ」

「『これは僕のアイデンティティだから簡単には外せないよ。外す時は何事にも僕が本気になった時さ』」

「ぼくに本気にはなってくれないのか？」

「『何言ってるのさニノちゃん。僕たちはまだ中学一年生なんだぜ？　あと一ヶ月は早いよ。一ヶ月経ったら真面目に一緒に考えようぜ』」

「一ヶ月なんてもうすぐじゃないか。禊くんって意外とせっかちなんだね」

「『可愛い彼女が他の男に寝取られたなんてなったら僕悲しくて死んじゃうからね』」

「その可愛い彼女の前で寝取られたとか言わないでほしいな。ぼくは禊くん意外に興味なんてないんだからね」

学校の敷地内で堂々とそんな会話をしながら歩く。周りの生徒がぼくたちの異常度に引いて行く。なんて言うか、ホントにモブキャラだなお前ら。もうちょっと違う行動とか出来ないの？　ドラクエ

の村の入り口に立ってる「ここは〇〇村です」って言ってる奴と同類だぞ。

禊くんと一緒に歩いて自転車置き場まで来る。徒歩の禊くんと違ってぼくは自転車通学だからわざわざここまで来なきゃならない。

漕ぐのはぼくじゃなくて禊くんなんだけど。

自転車の二人乗りは法律違反です、なんて真面目なことを言ってみたり。するわけないか。むしろ法律なんてくそくらえだ。

ガチャンと自転車のスタンドを上げて禊くんがサドルに跨る。ぼくは後ろの荷台に腰を掛けた。ペラッペラなカバンは二つとも前のカゴに押し込んだ。

禊くんがペダルに足を掛けてさあ出発だ、って時になって重大なことに気が付いた。行き先を決めてない。

「禊くん、結局どこ行くんだ？　ぼくん家以外で」

「『ニノちゃん家以外でなんて急激に選択肢の幅が狭まったなー』」

「いや、何も狭まってないと思うけど。ま、どっちでもいいけど。それで、どうするの？」

「『じゃあここは定番のニノちゃんの行きたい所っていう選択肢を提案してみる』」

「じゃあ商店街にあるアニメイトに行こう。禊くんをみっくみっくにしてやんよ」

「『じゃあ行き先は商店街のアニメイトで。ていうかニノちゃんいっつも行きたい場所ってアニメイトかとらの穴だよね。変えようとは思わなかったのか？』」

「おーもーわーなーいー。いいじゃん別に。一緒にエロ本でも買おうぜ」

「『エロ本！？　買う買う！　じゃあさっそく行こうよ！』」

「禊くんも男の子だね。エロ本はいいけど、寝取り寝取られ系のエロ本は禁止だよ」

「『じゃあそういうことで。早速行こうか』」

今度こそ禊くんはペダルを漕ぎ始める。学校の敷地内で二人乗りとか教師に見つかったら反省文ものだね。まあそんなことはどうでもいいんだけども。

すいすいと歩いている生徒をよけて学校を出る。それから駅前にある商店街に向かって進んで行く。

いやー、なんかテンション上がるわ。なんでだろうね。リア充してるからか。この短い自問自答も癖になっちゃったな。

異物は排除される。これって真理。（前書き）

まだ前の続きというか中学生ですよ。この話って作者もビックリするくらい淡々と進むんだよね。

異物は排除される。これって真理。

駅前まで来た所で一旦ストップ。ぼくの喉が乾いたから自販機でジュースを買うためだ。ジュースって言ったらＣＣレモンかファンタオレンジだよね。柑橘系の炭酸が王道だよ王道。

カバンから白の長財布を取り出す。その中から小銭を出して自販機に投入。ちなみに禊くんは少し離れた所にいる。

パッと自販機のボタンが光る。何を買うか迷うまでもなくぼくはＣＣレモンをチョイス。ボタンを押した。

ガコンという音と一緒にペットボトルが落ちて来る。それを取り出して禊くんの所に行こうと降り返ろうとしたところで、禊くんの分も買ってやるかという考えが浮かんだ。

禊くんにはファンタオレンジを買っていってあげよう。それでぼくにも飲ませてもらう。いい考えじゃね？　献身的じゃね？　違うか。

また財布から小銭を取り出してファンタオレンジを買う。取り出し口からファンタオレンジを取り出して今度こそ禊くんの所に戻ろうと振り返った。

「ニノちゃん危ない！」

そんな普段絶対聞かないような格好つけてない括弧つけてない禊君の叫び声が聞こえて――

「え？」

もの凄い衝撃が襲ってきてぼくは吹き飛ばされた。

クルクルと空中を舞って地面に叩きつけられる。形容出来ない凄まじい音がぼくの背後から聞こえてきた。たぶん車が自販機と壁に衝突した音だ。

ああ、痛いなちくしょう。鉄くさいし、血が流れてるよ。骨も折

れてる。こんな未来は知らないぞ。予測出来なかった。このぼくに。

「ニノちゃん大丈夫！？　待っててね、すぐに救急車呼ぶから！」

禊くんが駆け寄って来て涙目になりながら慌てて携帯を取り出す。括弧が外れたままになってるよ。

「禊くん……括弧……外れてる、ぜ……？」

「それだけ本気ってことさ！　僕はニノちゃんには、ニノちゃんだけには死んでほしくないんだよ！」

これが本音、か？　生きるも死ぬも同じようにしか考えない禊くんが死んでほしくないだなんて、嬉しいじゃないか。さすが禊くんだよ。めだかちゃんなんかよりも真黒くんなんかよりも大好きだぜ。

結構な事故だったからか、ワラワラと野次馬が集まって来た。「早く救急車を！」とか叫んでるけど、残念。救急車はもう禊くんが呼んだんだよね。

あー……ちょっと血が足りなくなってきたかな。眠くなってきたや。この程度じゃ死にはしないだろうけど（能力とかあるし。あんまり使わないけど）やっぱりキツイなちくしょう。

ま、後は禊くんに任せてぼくは寝ますか。禊くんとデート出来なかったのが心残りだけど、仕方ないよね。このデートはまた次回ってことにしよう。そうしよう。

じゃあ、お休み禊くん。また明日とか。

その後救急車で運ばれて夏休みの半分を病院で過ごすハメになった。マジキチだな。全然楽しくないよ。

てか何？　あの車。なんでぼくに突っ込んで来たのさ。意味わかんねーよ。なんで予測出来なかったとか、そんなレベルの話じゃないし。本当に突然唐突に突っ込んで来たんだ。よけれるわけないじゃないか。

しかもあれだけの事故の癖に負傷者はぼく一人だってさ。納得いかないよ。

今までにも何度か危ない目にはあってきたけどさ、今回のは文字通りの異常だって。痛かったし。どういうことだよ。今回ばかりはどっちでもいいとか言えないし。

と、一通り愚痴を零したところで一旦考察。ぼくは誰に何が起きるかってことを大まかに把握してる。それはこの世界がぼくが元いた世界じゃ漫画になってるからであって、そしてぼくがなにか行動しても結果が収束するからだ。まあ収束しなくても大部分はどうなるかわかるんだけど。それがぼくの能力の一部でもあるわけだし。

それがぼくはこの世界に元々いない人間だからぼくはぼくがどうなるかわからない。ぼくの能力でもぼくはぼくがどうなるか予測出来ないんだよね。ま、その不完全さがあるからぼくはまだ人間のカテゴリに入れてるんだろうけどね。

ま、それでなんだけど。今回のはホントに事故だったのかって話。だってあれだけの事故なのに負傷者はぼくだけなんだぜ。いやいや、誰かがぼくを殺そうとしたなんていうことを疑っているわけではないよ。ぼくに殺されるいわれはないし。

ただ、そうだな。ぼくはこの世界にとって異物だね。体内に入ってきたウイルスみたいな立ち位置だ。世界を変えようとしてるんだからそれが世界にとって良い存在であるはずがないよね。

だから白血球よろしく車がぼくを排除しにかかった。意外としっくりする考え。ま、ほとんど妄想に近い仮説だけどね。ぼくは世界の構造なんて把握してないんだし。そもそも別の世界から移ってくる奴なんて普通はいないわけだし。

あー、禊くんか真黒くんに会いたいぜ。出来れば禊くん。クラスメイトとかも結構見舞いに来てくれたけどさ、やっぱりあの二人の方がぼくとしてはクラスメイトの万倍嬉しいわけよ。

白黒のモブキャラが何か喋ってるのを見るよりもカラーの主要人物が喋ってる方が嬉しいだろ？

とか思ってたら病室のドアがガラガラと音を起てて開いた。ちなみに禊くんがどうやったかは知らないけど、何故かぼくの病室は個室だったりする。入院費が嵩むから両親の反応が心配だ。

禊くんが来たのかと思って期待してドアの方を見ると真黒くん……と何故かめだかちゃんがいた。なんで？

「やあニノちゃん。元気にしてたかい？　入院中寂しいと思ってお兄ちゃんが遊びに来てあげたよ！」

「ぼくと真黒くんは同い年です本当にありがとうございました……

で、なんでめだかちゃんがいるの？　まさかお見舞い？」

「それ以外になにがあるというのだ。ニノちゃんは私に来てほしくなかったのか？」

ぼくの疑問に少し怒ったのか憤然とした態度でそんなことを言ってくる。

「そんなことはないけど。今小学五年生だっけ。善吉くんはどうしたんだ？」

「善吉は今日は来ていない。たぶん友達と遊んでいると思うのだが」

へぇ。めだかちゃんと善吉くんはいつも一緒にいると思ってたんだけどな。ま、別にどっちでもいいけど。

ていうかお見舞いとか言うけど、なんでぼくなんかのお見舞いに来たんだろうか。わからないや。まあ理由なんてどうでもいいか。

「ん、ありがとう。まあ理由はなんにしろ見舞いに来てくれたのは嬉しいよ。あ、あと変態は引き取ってくれて構わないよ。ていうかむしろ帰れ変態」

放っとくと脱ぎ出しかねないからな真黒くんは。ぼくも一応女の子だぜ。気にしないけどさ。ここは個室とはいえ公共の場だからね。ＴＰＯは弁えてもらわないと。

「変態とは酷いじゃないか。一体僕のどこが変態なんだ」

「行動指針が妹・妹・妹なところとすぐに脱ぎ出すところと勝手に人のことを妹扱いするところ」

「どこにも変態な部分なんてないじゃないか」

「キリッとした顔で大真面目に嘘を吐くな。なんかもう存在が変態だね真黒くんは」

「存在が否定されちゃったよめだかちゃん！？　君からも何か言ってあげなよ！」

「すいませんお兄様。否定出来る要素が一つもありません」

「身内にまで見捨てられた！？」

真黒くんがいじられキャラに転じてるな。ま、別にどっちでもいいけど。そんなことよりも禊くんに会いたいな。いや、でも今はめだかちゃんがいるから不味いか。

黒神さん家の兄妹二人がギャアギャア騒いでるのを尻目にそんなことを考える。二人が来て一気に病室が騒がしくなったな。

あ、そういえばまだ見舞いの品貰ってないや。ここは定番のフルーツ盛り合わせとかくれるのかな。それもいいけどさ、入院中って暇なんだよね。だから暇が潰せるやつがいいな。

ああ、ホントだったら今頃禊くんとデート三昧だったのに。残念過ぎるよ。

「真黒くん。なんか持って来てくれた？　出来れば暇が潰せるやつがいいんだけど。ま、そんなに図々しい期待はしないけどさ。夢を見るのは乙女の特権じゃないか」

異物は排除される。これって真理。（後書き）

今回はここまで。中途半端だけど、毎度のことになるから許してね。

ニノちゃんのお見舞い事情。（前書き）

中学生最後。特に行動とか起こしてない。ちなみにニノちゃんは異常です。過負荷じゃないよ。

ニノちゃんのお見舞い事情。

こんな発言してる時点で図々しいかもしれないけど、だいたいみんな考えてることは同じだろ、退院出来るのがわかってる奴は。ぼくはそれを言葉にしただけだ。

ぼくの発言に真黒くんが「そうだった」と手に持っていた袋をぼくに差し出して来た。

「妹のことで僕にわからないことはないさ。というわけではいこれ。ゲーム機と充電器とカセット。電波飛ばないように出来るから病院でやっても問題ないよ」

真黒くんがそんなことを言うもんだから受け取った袋の中を確認する。中には箱に収まった携帯ゲーム機と充電器、それと人気のタイトルのカセットが幾つか入っていた。

それを見てぼくは思わず、

「愛してるぜ真黒くん。今だけなら真黒くんの妹でもいい気がしてきた」

そんなことを言うと先に反応したのは真黒くんではなくめだかち

ゃんだった。なにやら慌てた様子である。若干アックア口調になってしまった。

「いや、ニノちゃん。冗談でもそんなこと言わない方が――」

「やったねめだかちゃん僕の妹が一人増えたよ！　めだかちゃんより年上だからめだかちゃんのお姉さんだねでも僕からしたら妹だから何も問題はないんだだって今回は本人が僕の目の前で認めてくれたんだからね！　これでまた僕が頑張る理由が一つ増えたよ！　ていうか僕の部屋どうしようこれ以上妹グッズ置けないしだとしたらもう一部屋貰うしかないかなあぁ今から楽しみだ！」

「真黒くんが壊れた。どうやって修正しよう」

「既に遅かったか。アレを実兄だとは思いたくないな。まあ、大丈夫だニノちゃん。あれはただウザいだけで暫く相手にしなかったら元に戻るから安心してくれ」

いまだに暴走する真黒くんを見て溜息を吐く。なんでぼくの友達はこんな変態なんだろ。いや、変態だってことは元からわかってたんだけど。現実に目の前にすると変態過ぎて気持ち悪いな。個性どころの話じゃねーよ。

「……そうさせてもらうよめだかちゃん。今の真黒くんにはぼくでも近付きたくない。気持ち悪いのベクトルが禊くんとは違うから正

直ぼくからしてもただ気持ち悪いだけた」

「禊くん、とは誰だ？」

純粋な好奇心で聞いてきたのだろうめだかちゃんに、ぼくの中でやっちゃったなあという心が生まれたわけだがどうでしょう。まだめだかちゃんに禊くんの話をするのは早いよね。時期的にも展開的にも。てかぶっちゃけ禊くんにはめだかちゃんと会ってほしくないな。

まあでも会うことは確定してるからぼくの力じゃどうしようもないんだけどね。会わないように仕向けたとしても結果は収束するし。不便な世界だな。

めだかちゃんには事実だけを伝えることにしようそうしよう。

「ぼくの彼氏だよ。可愛らしい顔立ちをしていてね、事故った時もデートに行く途中だったんだ。ああ、惜しいことしたなぁ。もう少ししたら禊くんをみっくみくに出来たのに」

いや、ホント惜しいことした。今更だけど。禊くんって他から感化されやすいからすぐにミクにハマってくれると思ったんだけどな。残念だ。病院じゃミク流れないし。普通の歌も流れないけどね。

「ニノちゃんには彼氏というものがいるのか。本で読んだことはあるが実際どういうものなのかわらないな」

そういえば禊くんも言ってたね。めだかちゃんは恋を知らないって。ああ、これは未来の話か。なんだか混乱するね。ぼくだけか。

「別に無理に知る必要はないと思うけど。そのうち自ずとわかるんじゃない。それに、ほら……真黒くんが凄いことになってるし」

「めだかちゃんに彼氏なんてお兄ちゃんは絶対に許しません！　まだ早いって言うかそんなどこの馬の骨ともわからない奴なんかにめだかちゃんは任せられません！」

「いやまだめだかちゃんに彼氏とかいねーし落ち着けよ」

真黒くんはホントに騒がしいな。というか五月蝿い。いやまあその辺のモブキャラよりは全然マシなんだけど。ていうか比べ物になんないな、うん。

めだかちゃんはめだかちゃんでなにか考え込んでるようだし、どうなんのこれ。いつになったら静かになるのこの病室。個室でよかった。ナイス禊くん。ナイス両親。今だけは感謝しようじゃないか。

「――と、そろそろ僕たちは帰るよ。お大事に、とかはあんまり言わないけど、早く怪我を治してね。また一緒に遊ぼうか」

「失礼した。じゃあ早く怪我が治るといいな」

「唐突だな。まあいいや。んじゃまた今度ってことで。バイバイ」

時計を確認した真黒くんが帰ると言い出したから適当に手を振って見送る。変態は帰れとか言ってたけど正直帰られるのは少しさみしい。

まあ、仕方ないか。明日には禊くんが来るし、今日のところは真黒くんが持って来てくれたゲームでもやろうかな。ＲＰＧだぜＲＰＧ。やっぱ暇つぶしって言ったらロープレだろ。

「『やあニノちゃん。元気にしてた？』」

「元気のタイムセールやってたから昨日買っておいた」

「『あはは、相変わらず意味わかんないこと言うね、ニノちゃんは。それが君のアイデンティティなのかな？』」

「そんなわけないだろ。ぼくはいつも事実を織り交ぜた嘘をついてるんだ。むしろこっちがぼくのアイデンティティだろ」

昨日から一日経った今日。予想通り禊くんが病室に来てくれました。私服です。至福です。

白いシャツにジーンズっていうラフな格好だけど私服です。

「今日も今日とて禊くんは禊くんだね。なんかあった？　左腕とか包帯巻かれちゃってるけど」

「『ほら、僕ってすっごく弱いじゃん。だから今日も負けてきたところなんだ』」

「負けて、それで相手はどうなったの？」

「『え？　わかんないや。謝らないって言うから少し懲らしめてやったけどね』」

「その表現だけ聞くと勝ったように聞こえるんだけどな。負けたんだろ？」

「『うん』」

左腕の包帯は病院で巻いてもらったのだろうか、綺麗に巻かれている。血は滲んではいないが、なんとなく中は見たくなかった。

ていうか禊くん破壊活動してない代わりに喧嘩してたのね。結局喧嘩相手破壊してそうだし。ご愁傷様。

「喧嘩の理由は？」

「『えー？　それ聞いちゃうのー？』」

「気になるだろ。言ってくれなかったらぼくこれから先不眠症になりそうだなよ」

ぼくがそう言うと禊くんが溜息を吐いた。禊くんの溜息なんて滅多に見れるもんじゃない。レアだぜレア。

「『桜井さんから離れろクソヤローって言って殴られた。あれは痛かったな。包帯もそれの傷用だからね』」

「ちょっとそいつのこと教えて存在を消してきてやるから」

寝ていた身体をガバッと起こす。ぼくの禊くんに手を出すなんていい度胸じゃないか。ぼくは好きで禊くんの側にいるんだから禊くんにぼくから離れろなんて言うのはお門違いだ。消し炭にしてやろうか。

「『そんな物騒なこと言わないでよね。僕はあんまり気にしてないからさ。ニノちゃんに危ないことなんてさせられないよ』」

「そういう訳にもいかないよ。ぼくのせいで禊くんが怪我したんだ。ぼくがなんとかしなきゃいけないだろ？」

「『うーん……僕は気にしないんだけどなぁ。まあ、やるとしても怪我が治ってからだから、当分先だね。今は安静にしておきなよ。車椅子でしか移動出来ないんだしさ』」

禊くんがいい奴過ぎて泣けてきた。やべーよ禊くん。惚れ直した。

怪我するほど殴られてんのに気にしないだとか、男前だね。

まあ、手と足同時に折ってるから車椅子でしか移動出来ないってのはホントなんだけど。怪我人は辛いぜ。

「ま、わかったよ禊くん。今は大人しくしてるよ。車椅子を使わなくても移動出来ることは出来るけど、疲れるしね」

「『大人しくしててね。あ、それとこれお見舞いの品ってやつ。ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ五冊だよ」

そう言って袋に入った漫画を五冊ベッドの隅に置く禊くん。

「意地悪だねー禊くん。五冊なんて中途半端に。続きが気になるじゃないか。夜眠れなくなったらどうしてくれるんだい？」

「『そんなつもりじゃなかったんだけどな』」

禊くんが困ったように頭をぽりぽりと掻く。

ああ、こんな日常が続けばいいのになぁ。もうすぐ終わっちゃうんだよな、こんな日常が。

出来ることなら変えてやりたいけど、世界を変えられるタイミングは今じゃないし。残念だけど、変えられないんだよね。

確定した未来を変えろって言うけどさ、それがどれだけ難しいことかこの世界に来て初めて思い知ったよ。オカリンはすごいね。

ま、まだ時間はあるんだし気長にやりますか。

「ね、禊くん」

「『なんのことだい？』」

,

ニノちゃんのお見舞い事情。（後書き）

次回からは高校生編かな。本編はまだまだ先だけど。

ぼく、高校生になりました。（前書き）

『やあ禊くん。元気にしてた？　ぼくのこと忘れてないよね。忘れてたら思い出させてあげるよ』

『『忘れてないよ。忘れるわけないじゃないか。いや、それよりゴメンね。めだかちゃんに負けちゃった。ニノちゃんに忠告されてたのにさ、結局やられちゃったよ』』

『せっかく忠告してあげたのに。まあ負けることは悪いことじゃないよ。禊くんがそのタイミングでめだかちゃんと戦ったら負けることは世界の意思だったんだから』

『『世界の意思？　僕はめだかちゃんには絶対に勝てなかったってこと？』』

『そうだよ。だから戦うなって忠告したのに。まあいいや。そんなことよりぼく箱庭学園に進学が決まったんだぜ。すごいだろ』

『『このタイミングで自慢してくるニノちゃんの意図がわからない。まあ、おめでとう。箱庭学園に進学が決まったってことはまたこっちに戻って来るんだね』』

『そうなんだ。一人暮らしなんだけどね。両親はまだ仕事だよ』

『『残念だけど僕は箱庭学園にはい　行かないんだ。また一緒に学園に通いたかったな』』

『大丈夫だよ。あと二年くらい経てばまた一緒に通えるから』

『『随分具体的だね。それも世界の意思ってやつなのかな？』』

『そうだよ。既に決定されている出来事さ』

ぼく、高校生になりました。

やあ皆さんこんにちわ。将来ＡＫＢに入りたいと思っている桜井ニノです。嘘です。

今年から高校生です。箱庭学園に無事合格しました。所属は一年十三組。登校義務がないです。永久自習です。

ぼく中学一年生の最後に両親の仕事の都合で引っ越ししちゃってたんだよね。だから皆とお別れ。阿久根高貴とか安心院なじみとかには結局会わなかったな。いや、安心院なじみは見かけることはあったけど話しかけることはなかったからな。

まあそんなこんなで高校入学を機にぼくだけこっちに戻って来たんです。両親の知り合いが経営するマンションに住んでます。一人暮らしです。

てな訳でぼくは今日から箱庭学園生なのです。今日からってことは入学式があるんだけど、ぼくって登校義務ないから行かなくてもいいんだよね。いやまあ行くんだけども。暇だし。

新入生でごった返している学園内を歩く。クラスが一学年で十三もあるマンモス校だから仕方ないけどさ、人に酔いそうだよ。十三っぽい生徒とか一人も見当たらないし。

日之影空洞とか真黒くんはどこにいるの？　来てないの？　それだったらぼくが学園に登校する意味とか無いんだけどな。

入学式の会場に着く。クラス毎に椅子が並べられているけど、十三の椅子は見当たらない。理事会は十三の生徒は誰も来ねーと思ってんのかよ。立って式とか疲れるじゃねーか。

ま、別にどっちでもいいけど。

取り合えず後ろの壁にでももたれ掛かっておきますか。一人変なのがいるみたいに思われるかもしれないけど、仕方ないよね。

入学式が終わりました。いやホントに。つまんない式だったわ。知ってる奴もちらほらいたけどさ、別に話しかける程でもないし。

新入生が全員会場を出てからぼくも出る。ぶらぶらする理由もないから十三組に直行する。十三組の机にカバンを置いたままだからそれを回収したら帰ろう。人もいないし。

ガラガラと扉を開ける。教室に一歩入ろうとしたところで、教室のど真ん中にクソでけぇ人間が座っていた。センチというよりはメートルで表した方がいいような巨体。腕を組んで椅子に座っていて、ドーンと佇んでいるように見えた。

日之影空洞キタコレ。

普通の人には見えないというか覚えてられないらしいけど、まあそこはぼくだから。見えるし忘れもしないよ。忘れられないし。

取り合えず近付いて話しかけてみた。

「やあ。今日学校に来て初めてぼく以外の十三組生にあったよ。君の名前は？」

ぼくがそう挨拶すると日之影くんはなにやら驚いた様子だった。それから笑顔になると気さくに話しかけてきた。

「よお。お前も十三組生か。俺も今日初めて俺以外の十三組生に出会ったよ。今までどこ行ってたんだ？」

「入学式だよ。つまらなかったけどね」

「入学式？　アレ椅子無かっただろ。どうしてたんだ？」

「別に。後ろで立ってた」

「それで何も言われなかったのか？」

「十三組だし。何も言われないし言われるいわれもないよ」

日之影くんと会話をしながらカバンを置いてる机まで行く。カバンを取ったら帰ろうと思ったけど日之影くんがいるなら暫くいようかな。

「そういえばまだ名前聞いてなかったな。なんて言うんだ？」

「桜井ニノちゃんです。君は？　日之影空洞くんとか？」

「おう？　なんで俺の名前知ってんだ？」

「カンだよカン。ほら、疑問系だっただろ？」

「それもそうだな。ところで俺たちって永久自習らしいけど、お前って明日学校来るのか？」

「誰もいないなら来ないつもりだったけど、日之影くんが来るならぼくも来るよ」

「……そうか。でも、お前も俺のこと忘れるから、来ないんじゃないのかな」

最後の方は若干聞き取り辛かったけど、聞き取れたからもーまんたいだ。

日之影くんのことを忘れるなんてあるはずないし、日之影くんの異常はぼくにはなんの意味も持たないしね。

「ぼくは忘れたりしないよ。ぼくは覚えてる。ぼくだけは覚えてる」

なんて言ってみたり。オカリンかっての。リーディングシュタイ

ナーなんて持ってませんよ、ぼくは。まあ、忘れないってのはホントだけど。

「じゃ、ぼくは帰るよ。今日は会えてよかった」

カバンを持って教室のドアに手をかける。日之影くんの方を振り向いて一言。

「じゃ、また明日とか！」

まあ、禊くんのパクリなんだけどね。

入学式から一年経ちましたよっと。特筆することもないので飛ばさせて頂きました。

一年間何もなく平和な学園生活を送らせて頂きました。流石に毎

日空洞くんと二人じゃアレだったから途中で真黒くんを電話で呼び付けたりしたけど、問題ないよね。

久しぶりー真黒くんとか挨拶して三人で一緒に遊んだりしてたんだよね。永久自習だから授業も無いし。学校集まっても暇だったんだよね。

暇潰しにテストとか受けたりしたけど、結果はご想像にお任せするよ。言えることは良くも悪くもぼくたちは十三組生ってことかな。特例（スペシャル）なんかじゃ相手にならないよ。いろんな意味でね。

さて、二年生になったからって特に何かがある訳でもないんだけど。禊くんが来るまであと一年以上あるし。つまんないや。あ、禊くんとは一週間に一回以上必ず連絡とってるよ。引っ越したけど別れた訳じゃ無いし。

あー、何か事件でも起きないかな。起きないか。この世界じゃ幾らフラグを立てても世界にバッキバキに折られるし。なんていうつまらない世界なんだ。

なんて言ってたら真黒くんが理事長室に呼ばれた。

あー……そういえば真黒くんってフラスコ計画に一時参加してたんだっけ。いやさ、忘れてた訳じゃないんだけど、そっか。もうそ

んな時期か。じゃあ今年は空洞くんが生徒会長をやる年か。

空洞くんが生徒会長になったらぼく一人か。そうなったら寂しいなー。フラスコ計画にでもお邪魔させてもらおうかな。真黒くんが辞めるまで。

それとも真黒くんにフラスコ計画に参加させないよう工作するとか。無理か。収束するし。

あーあ、何しよっかなー……。

そんなことをうだうだ考えながら教室の空洞くんの指定席でぐてーと伸びている。登校時間は決めてないから三人集まるのはバラバラだし。というか真黒くんは事ある毎に空洞くんのこと忘れてるから大変なんだよね。

まあ、勿論ぼくは忘れたことはないんだけどね。忘れるなんてできる訳ないじゃん、あんな巨体。久々に色の着いた人間に出会ったんだぜ？　異常がぼくから色を奪うってんなら、ぼくはその異常を無効にしてやるよ。

いや、出来ないけどねそんなこと。ま、大抵の異常はぼくにはなんの意味もないよ。だってぼくだし。

ぼく、高校生になりました。（後書き）

禊くんはしばらく前書きだけの登場です。

ニノちゃん副会長就任。（前書き）

球磨川禊。僕の名前。

小さい頃から人生なんて無意味で無価値なものだと思ってた。生きるも死ぬも同じだし、誰が傷付こうが構わない。エリートなんて皆死んじゃえば世界は平和になるんじゃないかな。そんな風に考えた時もあった。

でも、そんな僕に転機が訪れたのは中学一年生の時。

入学式の日にいきなり僕に告白してきた奴がいた。過負荷（マイナス）で負完全な僕に気持ち悪いということもなく自然な態度で話しかけてきたその子に、僕は興味が湧いた。

桜井ニノちゃんというらしいその子は小さい頃病院で一度だけ会ったことがあった。その頃から雰囲気は変わっていたけど、考えてることは変わってない。

ニノちゃんと付き合う内に、僕は彼女が好きになっていたらしい。それを自覚したのが彼女が車に轢かれた時だった。

くるくると宙を舞って地面に叩きつけられた彼女。手足があり得ない方向に曲がっていて大量の血が流れている。僕は慌てたし焦ったし心配したし怖かった。こんな状況になって始めて本気で彼女を失いたくないと思った。

それなのに何も出来ない自分を歯痒く思った。自分を呪った。何が過負荷（マイナス）だ。何が負完全だ。大切な人一人守れやしないなんて。

その日から僕は決意した。負けてもいい。勝てなくてもいい。かっこ良くなくても綺麗じゃなくてもいい。でもニノちゃんを守ろう。主役じゃなくても誰かを守れるって証明しよう。ニノちゃんの夢を叶えてあげよう。

そう決意した。

ニノちゃん副会長就任。

「あーあ、帰ろっかな」

もう昼近くだけど誰も来ないし。頭回すのも疲れたしなぁ。家に帰ってもやることないけど。ま、別にどっちでもいいか。

そう思っての独り言だったんだけど。

「いやいや、帰ってもらっちゃ困るな。主に俺が」

ガラガラとドアを開けてのっそりと巨体が教室に入って来た。空洞くんだ。説明しなくてもわかるか。

「どうしたんだ空洞くん。何が困るんだよ」

立ち上がりかけていた腰を降ろす。空洞くんの指定席だけど問題ないよね。

「お前にちょっと話があるんだ。聞いてくれ」

「ん、別にいいけど。暇だし。けど、もうお昼だから食堂でご飯食べながらにしない？　ぼくお腹減ったし」

そう言ってカバンから財布を取り出す。白のシンプルな長財布。男物……だったと思う。去年十一組辺りの男子から貰った物だった気がしたけど、忘れたや。どうでもいいことだったし。

ぼくって結構モテるらしいんだけど、やめてよねー興味ないんだし。貰えるものは貰うんだけどね。いらなかったら捨てるだけだし。

ぼくの言葉に空洞くんは頷いた。

「それじゃ食堂に行くか」

「そうだね。早くしないと混んじゃうよ」

「それで、話って何？」

昼ご飯を適当に注文して席に着く。空洞くんと向かい合って座る。因みにぼくが注文したのはラーメン。昔から麺類が好きなんだよね。

「俺、生徒会長やろうと思うんだ」

「なんだそんなことか。知ってる」

なんだそんなことかよと思って若干ガッカリしながら即答する。もっと何か重要なイベントでもあるのかと思ったじゃねーか。どーしてくれんだ。ぼくの期待を返せ。嘘だけど。

ぼくの言葉に空洞くんは少し驚いたような顔をした後何故か呆れ顔になって首を振った。なんだその反応。

「お前が他人の諸々の行動とか考えを知ってることにはもう突っ込まん。去年からずっとそうだったしな」

「なにその諦めちゃった感じ。もうちょっと頑張ってみようよ」

「何をだよ！？　……てか、俺が生徒会長やろうとしてるってこと

を知ってんなら話は早い」

空洞くんが珍しく真面目な顔付きになると制服のポケットから折り畳んだ一枚の紙を取り出してぼくに渡してきた。広げて見るとその紙には校則とか生徒会の活動内容とか選挙の日程とかが書かれていた。で、最後に署名欄。

「何これ？」

紙を片手で摘まんでぴらぴらさせながら空洞くんに聞く。合間にズルズルとラーメンを啜る。早く食べないと麺が伸びちゃうしね。

そんなぼくの態度も気にすることなく、空洞くんは食べかけの唐揚げ定食を脇にどけると両手を着いて頭を下げてきた。

「選挙活動を手伝って欲しい。それと、俺が生徒会長になった時に桜井に副会長をしてもらいたい」

「うん、別にいいけど。空洞くん気張り過ぎじゃね？　こんなにしなくてもいつでも手伝ってあげるよ、暇だし」

そう言って頭を上げさせる。ぼくって紳士。でもぼく女だったな。ま、別にどっちでもいいか。

「ほ、本当か！？　いや、助かる！」

顔を上げてお礼を言ってくる空洞くん。

正直暇だしどうでもよかったんだけどぼくも人間だからお礼とか言われちゃうと俄然やる気が出ちゃうっていうかそもそも選挙活動とか何やるか知らないけど空洞くんとかどうやって生徒会長になるつもりだったの他人に全く気付かれないのにこの学園で空洞くんのことといつでも覚えてるのってぶっちゃけぼくくらいだと思うんだけどその辺どうするつもりだったのかなやっぱり空洞くんの異常を抑えるためにぼくを使うとかかなその場の一人が気付けば皆気付くって言うしだったらぼくも頑張ろう。

そう思えるくらいにはやる気出た。

「で、空洞くんはもう立候補したのかな？」

「ああ。今日学校に来てすぐにな。だから教室に行くのが遅くなったんだ」

「この紙って応援演説する人が書く紙だよね。ぼくみたいな変な奴が応援演説なんかしちゃっていいの？　こういうのって普通前の生

徒会の人にやってもらうんじゃないの？」

「いや、お前でいいんだ。むしろお前がいいんだ。俺のことを忘れないでいてくれる奴なんて桜井くらいしかいないからな」

「感動した。心にきたよ今の言葉。一週間頑張ってあげるよ。ま、空洞くんが生徒会長になることなんて空洞くんが産まれた時から決まってたことだけどね」

「その自信はどこから湧いてくるんだ」

空洞くんがそんなことを言ってくるもんだから、返答の内容を考える。別にさらっと返してもよかったんだけどそれだと空洞くんのリアクションが楽しめないじゃないか。

うーんと少し考えてから口を開いた。

「未来から、かな」

何故か空洞くんに呆れられました。

場面転換多いよね、この章。おっと、メタ発言だなこれ。自重しよう。出来たらだけど。出来ないかも。

まあ別にぼくがメタ発言したからってどこかの誰かが困るわけでもないだろうし害は無いと思うんだよね。でもそんなこと普通は堂々と言わないからっていうかメタ発言は作品の質が落ちるからやらないでって言われるのが普通だよね。ぼくは気にしないけど。だってぼくの人生は作品じゃないし。もしかしたらの話をしたまでしゃん。

まあそんな物語にちっとも関係ない話はダストシュートするとして、今は選挙の話だっけ。

結論だけ、書く。

成功した。成功した。成功した。成功した。成功した成功した成功した成功した成功した成功した成功した成功した成功した成功し

た成功したぼくは成功

ぼくは選挙活動に成功した。

何が良かったんだろう正直ぼくの応援演説はそれ程でもなかったから地道な選挙活動の賜物なのかな。

とか、阿万音鈴羽風に書いてみたり。いらない演出だったか。でも書きたかったんだ。反省はしてる、後悔はしてない。

まあつまりわかりやすく言うと無事に空洞くんが生徒会長になりました。話を持ち掛けられてから二週間くらいしか経ってないんだけどね。ぼくが空洞くんの存在を皆に広めてあげましたよ。皆忘れてそうだけど。

あ、空洞くんが生徒会長に就任したから勿論ぼくも副会長になりましたよ。空洞くんが当選したその日に。

五人中二人が十三組生っていう異色の生徒会なんだよね、第九十七代？　生徒会って。数字は正確じゃないけど。興味無かったし。

まあ生徒会は二人じゃ務まらないから残りの三人はぼくが適当に見繕ってきたんだけども。ホントは会長が動くべきなんだろうけどさ、だーれも空洞くんのこと覚えてないからぼくが動いた方が早かったりするんだよね。

そんなぼくは今生徒会室の椅子に座ってゲームをしてたりする。校則？　あーあー聞こえません。

てかぼく副会長になったから制服が白から黒に変わったんだよね。ぼくはそれ程違和感ないんだけどさ、壊滅的に黒い制服が似合わないんだよね、空洞くんは。初めて空洞くんが黒い制服着た時とか普通に笑ったし。

あ、ゲームオーバーになった。

キリが着いたゲームの電源を切って机に置く。長時間同じ姿勢をしていた身体をほぐすために伸びをした。

「暇だねぇ、空洞くん」

「いや暇じゃねーだろ。どんだけ書類溜まってると思ってんだ」

ぼくのすぐ近くに座っている空洞くんはずっと書類の整理をして

たりします。束になって積んであるやつを。因みにぼく以外の生徒会は皆似たような状況だったりする。つまり暇なのはぼくだけ。なんという。

「だってぼくのノルマはとっくに終わらせたし。自分のやつは自分でやるって言って意地張ってんのは空洞くんじゃん。皆の仕事が終わらないとぼくは一人で暇なんだよ」

伸びをやめてべちゃっと机に倒れる。ぼくはぼくに回ってきた仕事はとっくに終わらせている。なんか簡単だったし、量少なかったし。で、終わって暇だから皆の仕事を手伝おうとしたら皆自分でやるって言うし。そうなると相手がいないからぼくって暇なんだよね。

暇潰しに生徒会に入ったのに、まさかその生徒会で暇を享受することになるとは。

「はあ。もういいや。暇だし、ちょっと校内の見回りでも行って来るよ」

ここにいても皆相手にしてくれなさそうな雰囲気だったから取り敢えず出ることにした。見回りっていうかただ校内をブラブラと歩き回るだけだけど。ついでに部費の陳情を出してきてた部活でも見て回ろうかな。

「見回りって、お前ただ校内歩き回るだけだろ」

「いや違うし。部活の視察に行くんだし」

「なんだよ取ってつけたみたいに」

ていうかなんかもう空洞くんにはバレてるなぼくの行動パターン。

一年も一緒にいれば当然か。

ニノちゃん副会長就任。（後書き）

作品のタイトル募集します。なんとなくノリで付けていたタイトルなので、何かいい案があれば感想とかの欄に投稿しちゃって下さい。お願いします。投稿がなかったらこのままいきますね。

エンカウントする王様と二年の終わり。（前書き）

「前のあれ何なの。恥ずかしくない？」

「『僕の決意表明さ。ニノちゃんは危なっかしいからね、僕が守ってあげるよ』」

「感動した。……って言いたいところだけど、だったら禊くん早くぼくの所に来て欲しいな。ぼくの秘密知ってるの禊くんだけなんだぜ？」

「『秘密って、前世の記憶とか世界の構造とかニノちゃんの能力とかのこと？』」

「うんそれ。まあ世界の構造はぼくの推測なんだけどね。でもぼくに対する死亡事故的なものの確率の高さと結果の収束は見過ごせないし。概ねそんな感じだとは思うんだけどな。こればっかりはどうしようもないや」

「『相当ファンタジーな話だけどね。ま、僕の大嘘憑き（オールフィクション）も人のこと言えないんだけどさ』」

「やっぱり却本作り（ブックメーカー）は無くしちゃった？」

「『うん。安心院さんに持って行かれちゃった。ごめんね、ニノちゃん』」

「禊くんが謝ることしゃないよ、ぼくの読みが甘かった。やっぱり安心院さんは一筋縄じゃいかないよ。ま、全部思い通りになる人生

なんてつまらないからいーんだけどさ。未来なんて見えちゃうと特にね」

「『そうだね。うん、僕も頑張るからさ、ニノちゃんも頑張ってね』」

「ありがとう。頑張るよ」

エンカウントする王様と二年の終わり。

それもなんか悔しいな。行動パターンを悟られないのがぼくのアイデンティティなのに。

「ようし、見てろ。ぼくがきっちり部活を見極めてきてあげようじゃないか」

そう空洞くんに宣言して立ち上がる。メモ帳とシャーペンを胸ポケットに入れた。準備は万端だ。

「下校時刻までには帰って来いよ」

「そんな余裕ぶっていられるのも今の内だけだからな！」

そう言い放って部屋のドアを開けた。空洞くんに宣言したおかげでなんか気持ちがスッキリしたような気がする。ま、頑張りますか。

そう思って生徒会室から取り敢えず文化系の部活を身回ろうと考えて出て行った。

「会長、副会長とずいぶん仲が良いんですね」

「そうか？　ま、友達だからな。それにああ見えて単純だよ、あいつは。純粋なんだよ。いろんな意味でな。一つのことしか熱中出来ないんだ」

「そうですかね」

「適当な言葉や適当な態度で複雑に見せてるだけで、いつも目は一つのことしか見てないんだよ」

「文化部コンプリートキタコレ。このメモを見せれば空洞くんも驚くきっと驚くもう驚いた顔が見えてるよぼくのヴィジョンには」

部活の見回りを初めて一時間くらいがたった。校内の文化部視察は全部終わった。

部費の陳情を出した出してないに関わらず、現状維持、増額、減額の三つに分けた。部費をくれと言われても予算は増えないから、どこかから削り取ってどこかに回さなきゃやってられないのだ。

というのはぼくのただの言い分なんだけども。別に今すぐ部費を変えるわけじゃないしさ。ていうか今年度はもう無理だからやるなら来年からだな。

ま、なにはともあれ次は運動部だな。ぼく野球とかって結構好きなんだよね。夏の間は甲子園でしょ、やっぱ。

下駄箱に行って靴を履き替える。グランドまで若干距離があるから歩かなければいけないのがめんどくさいなあ。まあマンモス校に通う宿命か。

そんな風に考えながら歩いていたら、何故か王野郎にエンカウントされました。大きな身体にオールバックの金髪、不遜な態度で歩いてるそいつになんでエンカウントしたんだよと。

まあエンカウントされたってぼくが無視してエスケープすればいいだけなんだけど「ちょっと待て」ちくしょう話し掛けてくんな部活が見に行けなくなるじゃねーか。

「なに？　何か用かな都城王土くん。ぼくは今忙しいんだけどな」

基本的な部分でこいつはあんまり好きじゃないからな。なんかもう名前知ってることとか隠す気もねーや。副会長だから全校生徒の名前知ってました的なノリでいけるんじゃね。

都城王土の前で立ち止まって顔を見上げる。微妙に笑ってるけどホントに何しに来たんだこいつ。

「偉大なる俺がお前に俺の質問に答える権利を与えてやる。お前は桜井ニノだな？」

名前知ってることとかに突っ込みなしかよ。まあいいや。さっさと終わらしてさっさと行こう。

「そうだけど。それがどうかしたのかな」

「お前、フラスコ計画に参加しろ」

「嫌だよそんなの。勝手にやっといてよね」

なにこいつぼくをフラスコ計画に勧誘しに来たわけ？　おかしくね？　普通理事長に呼ばれてからだろ。何がしたいんだこいつは。

「てか簡単にフラスコ計画の話なんかしていいの？　ぼく生徒会副会長なんだけどな」

「冗談を抜かすな。真黒くんはお前からフラスコ計画の話を聞いたと言っていたぞ」

ん？　真黒くんから話を聞いたのか。でもなんでぼくの所に来たのかはよくわかんないけど。

「へー、真黒くんがね。でもぼく真黒くんにフラスコ計画なんかの話したっけ？　真黒くんが理事長からフラスコ計画に誘われたことは知ってたんだけどな」

「お前のその異常性は異常の中でも異常だと真黒くんが言っていたからな。興味が湧いた。これは命令だ。フラスコ計画に参加しろ」

「だから嫌だって言ってんじゃん。ここまでぼくがはっきり断るのって珍しいんだぜ？　どうせ真黒くんもすぐ辞めるしさ」

「それもまた真黒くんが言う予言か？」

「ぼくは予言なんて今まで一度だってしたことないよ。確定した事実を言ってるだけさ」

「確定した事実？　まるで未来が見えてるような言い方だな。お前の異常はそれか？」

「ぼくの異常はそこじゃないよ。それも含めた何かさ」

溜息を吐きたくなるくらいめんどくさい。なんだこいつ。ぼくを先に進ませろって。律儀に返答するぼくもぼくだけどさ。

「そろそろ行っていい？　ぼくも暇じゃないんだよね」

「まあいいだろう。偉大なる俺が許してやる。今日のところは行っていいぞ」

なんか嘘っぽい笑顔と言葉だな。こっち見んな。もう来るな。

「じゃ、ぼくもう行くか――」

「ただし、俺の言葉に逆らえたらな」

フェイントかよ。マジやめてよね。そんなキャラだったっけ。

「『跪け。』」

自信満々の声で命令してくる都城王土。なんか身体、特に頭がピリピリするけど、操られる程じゃないかない。まあ別に電磁波なんてシャットアウト出来るんだけどね。

「副会長として忠告しといてあげるけどさ、人に命令するのやめた方がいいんじゃない？　ぼく程度の人間に効かないなら他の人間にも効かないよ」

そう言い残して歩き始める。言葉に逆らえたら行っていいって言ってたしもういいよね。これ以上絡んでこないよねきたら潰す。

「それじゃバイバイ。ま、いつかまた会うんじゃない？」

めだかちゃんがフラスコ計画潰しに行く時とかにもしかしたら会うかもね。それまでは会いたくないけど。

「いやー、都城王士くんとかに途中絡まれてさ、大変だったんだぜ。褒めてくれよ。駄目か」

生徒会室に戻って空洞くんにメモを見せる。戻るのが結構遅かったから生徒会室には空洞くんしか残っていなかった。

結局今日は真黒くんに会わなかったな。まあフラスコ計画でも頑張ってるのか。ご苦労なことだね。ぼくはしたくないけど。

「まさかお前が真面目に部活見て来るなんてな。生徒会室を出て行くための口実だと思ってた」

「酷いなー空洞くん。そんなわけないだろ。ぼくはいつでも真面目に仕事してるよ」

「これは仕事じゃないけどな。まあ助かったよ。これを見て部費の割り振り決めるわ」

「ようやくぼくの努力が実る日がきたようだね。努力したの今日だけだけど」

「それは努力とは言わない」

空洞くんの近くの席に座る。うず高く積まれてた書類は何時の間にか処理し終わったらしい。いや、すごいね皆。あんな量の書類なんてぼくだったら放置するわ。

生徒会室っていろいろ物っていうか備品があるんだけど、お菓子もその中の一つなんだよね。いや、ぼくが勝手に持ち込んだんだけどね。置いといたら備品認定されちゃった。定期的に持ち込んでるんだよね。

その備品のお菓子を一つ取る。皆ご存知ポテトチップスだ。因みにコンソメ味。コンソメ美味しいよコンソメ。

「空洞くんも食べる？」

「帰ったら夕飯だろ。むしろ食べるなよ」

「ぼく一人暮らしだからカンケーないし。夕飯は夕飯で別に食べるからもーまんたいだよ」

今更だけどもーまんたいって表現古いよね。まあ好きだから使うんだけどさ。

「そうかい。お前がそれでいいんならいいんだがな。……と、そろそろ下校時刻だし帰るか」

「えー、ポテチ開けたばっかなのに。どうしてくれるんだこれ」

ぼくがポテチの袋を開けてすぐに空洞くんが荷物をまとめて帰り支度を始めやがった。この部屋の鍵は空洞くんが管理してるから空洞くんが帰るなら自動的にぼくも帰らなきゃいけなくなるんだけど。

「袋閉じてしまうか持ち帰れ」

「そーするよ」

輪ゴムで袋口を閉じる。お菓子が一カ所に纏められてる場所に置いた。少し湿気っちゃうかもしれないけど持ち帰る程でもないしな。

「じゃあぼくも帰るよ。ていうかそろそろ夏になるけどさ、この服って夏服とかないの？　ぼくたち夏でもこの長袖着てなきゃいけな

いの？」

「諦めろ。制服改造なんてしたら風紀委員に目を付けられるからな。特に十三（俺たち）の後輩の雲仙なんかに絡まれたらめんどくさいからな」

「それ暗に夏服なんてねーから長袖で過ごせって言ってるようなもんだよね」

「諦めろ」

「くっそう理事会に夏服申請してやる」

長袖で夏なんて過ごせるか。夏服の申請が通らなかったら生徒会則だろうがなんだろうが制服脱いで過ごしてやる。副会長の腕章は外さないけどな。

空洞くんと一緒に生徒会室を出る。空洞くんが鍵を閉めるのを待ってそれから歩き始めた。

「空洞くんなんかイベント作ってよ生徒会主催かなんかでさ。今のままじゃ副会長なのにぼく暇なんだぜ？」

「お前は俺達の仕事を増やして楽しいのか？」

「イベントの管理運営とか書類はぼくがやるからさ、提案企画してよ会長」

「全部お前がやるんだったら考えてやるよ」

「マジか。頑張ってるみるよ」

みたいな遣り取りをやりながら帰る。今日は都城王土くんに会ったけど、あれを除けばこれが概ねぼく達の日常生活だったりする。平和だね。ほのぼのしてるし。こんな学園が来年には戦場と化すのか。萎えるわ。

ま、今はこの状況を楽しみますか。来年くらいまではさ。

ぼくたちももうすぐ二年が終わって三年になるらしい。今は三月の初めだ。

あっという間の二年だったな。楽しい思い出ばっかりだし。普通に修学旅行なんかにも参加したんだぜ。なんて感傷に浸ってみたりするんだけど、ぼくのキャラじゃないよねわかってる。

今は旧館通称軍艦塔（ゴーストバベル）の真黒くんの部屋に三人集まっている。三人っていうのは勿論ぼくと真黒くんと空洞くん。

真黒くんの部屋は壁中にめだかちゃんの写真が貼ってあってめだかちゃんのビデオが棚に収まっていて所狭しとめだかちゃんフィギュアが並んでいる。相変わらずの妹愛で気持ち悪いわ。

「卒業式も終わったし、ぼくたちもうすぐ三年生だぜ。どうするよ、これから」

「そりゃまあ受験勉強だろ。俺達受験生なんだぞ」

「僕は違うけどね。受験勉強するんだったら軍艦棟（ここ）開放するよ？」

「受験勉強とかぼくたちに必要？　物凄く疑問なんだけどその辺ど

う思う空洞くん」

「やり過ぎて困ることはない、くらいか」

「そんなことより聞いてよ二人共。年度が明けたら僕の妹めだかちゃんが箱庭学園に入学してくるんだ！　どう？　凄くない？　二人共仲良くしてあげてね、十三組の先輩としてさ」

「めだかちゃんで思い出したけど、空洞くん次の生徒会長どうするの？　まあぼくは誰がなるか知ってるんだけど一応聞いておこうと思って。もしかしたら違うって可能性が無きにしも非ずだからね」

「誰がなるか知ってるとか本当にお前はいつまで経ってもお前だな。まあそれは気持ちが傾くから聞かないことにして、正直に話すとまだ何も決めてないんだ」

「それを決めるのはめだかちゃんが入学してからでもいいんじゃない？　元より日之影くんが後任を指名するシステムじゃないんだし」

「それもそうだね。ま、その点副会長のぼくは気楽だけど」

「いやどうしてお前が納得してんだよ」

「なんとなくに決まってんだろ常識考えろ」

「まあまあニノちゃん。何はともあれ僕たち三人仲良くやっていこうじゃないか」

「……そうだね。そう出来たらいいね」

「お前にしてはえらく歯切れが悪いな。どうしたんだ？」

「いや、何でもないよ。ただ希望的観測にあんまり縋らないようにしただけさ」

そんな会話を延々と続けるぼくたち。十三組生では考えられないくらいの仲の良さ。居心地はいいけど、これが果たしていつまで続くやら。正直真黒くんや空洞くんを苦しめるようなことはしたくないけど、それじゃあぼくは報われないからね。他人の努力は嘲笑うけどぼくの努力は結果を出したいからね。ま、今のところまだ何もしてないに等しいんだけど。

めだかちゃんが入学するまであと一ヶ月。禊くんが来るまで半年もない。何処をどう改変するかなんてその時じゃないと決められないけど、まあ注意して行動しなきゃね。

これもたぶんの話なんだけど。めだかちゃん達が入学してきた年が世界が変わるターニングポイントだと思うんだ。てかそれ以外考えられない。これで世界が変わらなかったらぼくにはもうどうしようもないよ。世界線の収束とか言ってる場合じゃないし。

ま、深く考えずに気楽に行きますか。

「そういえば空洞くんってなんでぼくに副会長頼んだの？」

「い、今更そんなこと聞くのか……？」

「ほら、ふと気になることってあるじゃん」

「そ、それは……と、友達だったからだ！　それ以外に意味はない！」

「ふーん、そう。空洞くんがそう言うんならそうしとくよ」

「日之影くん怪し過ぎ」

「う、うるさい！」

めだかちゃんが入学してきた件。（前書き）

『『やあ久しぶり。球磨川禊でーす！　ここは僕の独り言を呟くスレになりました！』』

『そんなわけないだろ調子に乗るなよ禊くん。ここは今も昔もぼくによるぼくのためのぼくのスレだ。スレ違いの勘違いヤローは出て行くかＲＯＭ専に回ってください』

『『久しぶりなのになんかニノちゃん冷たくない！？　けどまあ嫌いじゃないぜ』』

『禊くんＭだったんだ正直引くわーぼくＳとかじゃないし』

『『違うけどね。そんなことよりなんかあったんじゃないの？』』

『ああ、そういえばめだかちゃんが入学したよ。その影響かなにかは知らないけどさ、この世界のぼくの絶対優位が若干崩れかかってるんだよね。どう思う？』

『『ニノちゃんのキャラがブレてるからだよきっと。アイデンティティをしっかり保って』』

『うん。気を付けるよ。それじゃ禊くん、また明日とか！』

『『うん、じゃあね……あの、また明日とか！　っての僕も使ってみよう』』

めだかちゃんが入学してきた件。

人吉善吉は帰り支度をしていた。

入学式も無事に終わってクラスの担任の紹介や次の日の連絡事項などの伝達が済んだから解散の号令が出ていたからだ。

鞄に荷物を詰め終わり帰ろうとしたところで教室の扉が勢い良く開いた。入学したてでまだまだ雰囲気の固いクラスでそんなことをやらかす奴は一体誰なのだろうと目を向けると、そこにいたのは一人の少女だった。

長い絹のような艶のある黒髪に完成された美しい顔立ち、大きな胸。

幼馴染だった。

「善吉！　敬愛する先輩に挨拶へ行くぞ！」

ズカズカと近付いて来ながらそんなことを言う幼馴染黒神めだか。

「へ？　だ、誰だよそれ……真黒さんか？」

「違う。あんな変態兄貴ではない」

「じゃあ誰なんだ――うわ！　ちょっと待てって！」

誰かを聞き出す間もなく腕を掴まれて引きずられて行く。随分ご機嫌だが一体何があったのだろうかと疑問が湧く。

「誰の所に行くんだよ！？」

その善吉の質問にめだかは嬉々とした声で答えた。

「桜井ニノ先輩――ニノちゃんの所だ！」

相変わらず今日も黒の生徒会専用の制服を着て生徒会室にいるん

だけど、何故か他の皆は出払っててていないんだよね。まあ空洞くんが何してるかなんてのは大体予想が着くからいいんだけどさ、他の三人は何処行ったんだろ。予想がつかねー。

ま、何処に行ってようがぼくとしてはどっちでもいいんだけどさ。

暇だな。あり得ないくらい暇だ。空洞くんが戻って来るまで待つか。いやそれだと暇だ。真黒くんの所に行こうかな。いつでも大歓迎状態だしな、真黒くん。そうしようかな。そうしよう。

鞄を持って立ち上がる。ついでにお菓子も持って行こうと思ってクッキーとチョコの袋を鞄に入れた。

よし、準備万端。と言っても鞄にお菓子入れただけだけど。そんなの関係ないよね。じゃあしゅっぱーつ。

てところで部屋のドアが開いた。空洞くんでも戻って来たのかな。違うか。足音が空洞くんのじゃなかったし。

ドアの方を見るとめだかちゃんとめだかちゃんに引きずられて善吉くんがいた。どんな状況だこれ。てかめだかちゃんの白制服は新鮮だな、なんか。ぼくだけか。

「どうしたんだよ二人共。生徒会室に何か用でもあったかな」

ぼくの質問にめだかちゃんは首を振ると生徒会室に入って来て扉を閉めた。

「いえ、そうではなく私たちは桜井ニノ先輩に挨拶に来たのです。箱庭学園に通う後輩として、先輩に」

「そうなんだ。まあ、そんな固っ苦しい喋り方はしなくてもいいよ。昔みたいにニノちゃんって呼んでよ。久しぶりなんだしさ、桜井先輩なんて他人行儀だとぼく傷付いちゃうぜ？」

「それは失礼した。いや、ここは学園でニノちゃんは名実共に私たちの先輩なのだから先輩と呼んでみようと思ったのだが、ニノちゃんが不快だと思うのならやめる」

「うん、そうして。ところで善吉くんはいつまで床に転がってるつもりなの？」

善吉くんはめだかちゃんに引きずられて来たっぽいし、なんか道中に力尽きてそうで部屋に入って来た時には今みたいに床に倒れてたたんだけど。いつまでも床に倒れてるのもどうかと思うんだよね。ここ生徒会室だし。

ぼくの言葉に善吉くんはガバッと立ち上がった。

「状況についていけてなかっただけですよ。お久しぶりです、桜井先輩」

「やだなー、善吉くんさっきのぼくの話聞いてなかったの？」

「そんなこと言われてもいきなりタメ口にできるわけないじゃないですか。誰がなんて言おうと桜井先輩は先輩なんですから」

溜息を吐きながらそう言う善吉くん。その姿には暗に諦めて下さいと言っている雰囲気が滲み出ていた。

ま、ぼくとしては別にどっちでもよかったんだけどね。強制させるつもりとかないし。めんどくさいじゃん。

「まあそれはそれでいいよ。別に強制させるつもりはないし。ていうか立ってるのもあれだし座らない？」

空いている席に座るよう促してぼくも元の席に座る。真黒くんの所に行く予定だったけどいい暇潰しが来たし真黒くんの所に行くのはまた今度でいいかな。

「改めて久しぶりだね。真黒くんの話にはよく出てきたんだけどさ、実際に会うのは数年振りってところかな」

「そうだな。あの変態……じゃない、兄貴の話によく出てきた。十三組生が生徒会をやっているのは異例のことだ、と言っていたぞ」

「らしいね。でもま、ぼくは誘われて副会長をやってるだけだからさ、ホントに異例なのは今の会長じゃない？」

ぼくがそう言うと二人とも頭を抱え始めた。特にめだかちゃん。その頭でわからないことがあるとか。みたいな感じじゃない？

ま、仕方ないと思うけどね。空洞くんの異常は防げるものじゃないし。ぼく？　ぼくはほら、あれだよ。所謂チートキャラってやつ。嘘だけど。

ホントにチートキャラだったらとっくに世界を改変してるっつーの。

知られざる英雄（ミスターアンノウン）ってオンオフが出来たら使い勝手がいいんだろうけどさ、あれって常にオン状態だからダメなんだよね。使い勝手がいい異常だったら空洞くんも苦労しなかっただろうに。

「空洞くんのこと思い出そうとしてもたぶん無理だと思うよう。諦めなって」

「何故だ？　生徒会長なら入学式で挨拶していただろう」

「その程度の認識しかないなら尚更無理だよ。だって空洞くん影薄いし」

「影が薄いかどうかは関係ないことだと思うのだが」

「というか、思い出すのが無理ってどういうことですか？」

善吉くんが至極まっとうかは知らないけどまあ普通の人間なら普通に気になることを聞いてくる。さすが普通代表！　ぼくが勝手に思ってるだけだけど。

「そういう体質なんだ、空洞くんは。こればっかりはどうしようもない。めだかちゃんでもね」

そのぼくの言葉に黙り込む二人。全ての人間を幸せにする、なん

ていう無茶な大義名分を掲げるめだかちゃんにはショックな内容だったかもね。その分だと善吉くんの方は現実をキチンと受け止める強さがあるけど。ていうかたぶん善吉くんはなんのことかわかってないんじゃないかな。日之影空洞なんて人間の記憶は忘れちゃってるわけだし。

「体質、とは一体なんなのだ？」

「近い将来嫌でも痛感することになると思よ。まあ強いて言うならぼくたち十三組生に備わってる異常な部分、といったところかな。勿論ぼくにもあるし、めだかちゃんにだってある。残念ながら善吉くんには無いけど、こんなものない方があるよりよっぽどいいよ」

そんな会話をしていると廊下からノシノシといったような足音が聞こえてきた。この足音は空洞くんかな？　やっと戻って来たんだ。

空洞くんって無駄に自信持ってるよね。あとめだかちゃんも。（前書き）

「もしもの話として、ぼくが死んじゃったら禊くんはどうする？」

「『とりあえず生き返らせる。死んだことを無かった事にする。それでその後、ニノちゃん殺した奴を探しに行く』」

「誰も他殺だなんて言ってないだろ？」

「『それでも生き返らせることに変わりはないよ』」

「おいおい、ぼくは死ねないのかよ。死ぬ度に生き返らされて禊くんの側にいろってことか」

「『側にいろとまでは言わないけど。僕はニノちゃんに死んでほしくないし。生き返らせる手段があるから生き返らせる。普通だと思うけど』」

「うん。禊くんの普通が何かわかった。じゃあ、もし生き返らせる手段が無かったら？」

「『なに？ニノちゃん死にたいの？』」

「そんなわけないだろう。もしもの話だって。まあ、いつか死にたくなる時が来るかもしれないけど、少なくとも今のぼくに自殺願望なんて微塵もないよ」

「『それならよかった。うーん、でも大嘘憑き（オールフィクション）が無い状況でニノちゃんが死んじゃったらかー。考えたことも

なかったなー……』」

「よかったじゃん。今が考えるチャンスだよ」

「『ニノちゃんが死んじゃったら、そうだなー。その時はーー』」

空洞くんって無駄に自信持ってるよね。あとめだかちゃんも。

「どうやら空洞くん本人が帰って来たみたいだよ。足音とか聞こえるし。ま、君たちじゃあ認識出来ないだろうけどね」

ガラッと扉が開く。扉の向こうにはセンチというよりはメートルで表した方がいいようなデカさのゴツイ人間ーー空洞くんがいた。今更こんな描写いらなかったか。

けど、扉が開いたっていうのに二人は見向きもしない。知られざる英雄の効果かな。どっちでもいいけど。毎回不思議なんだよね。音とかしてるのに気付かないってさ。

ま、そんなことぼくには関係ないけどね。だって見えるし、空洞くん。

「おかえり、空洞くん。今日も学園の平和を守ってたとか？」

ぼくがそう言うとめだかちゃんと善吉くんの二人が今更のようにバッと空洞くんの方を向いた。

「お前じゃないんだから、そんな大層なことしてねぇよ。……で、そっちの二人は誰だ？」

歩きながらそんな質問をしてくる空洞くん。生徒会長の席に座って二人を興味深そうに眺めている。

「ん？　空洞くん気付かないの？　ならいいや。この二人はぼくの幼馴染でね。人吉善吉くんと黒神めだかちゃんだよ。めだかちゃんは真黒くんの妹だね」

「おお！　だから何処かで見たことあるような顔だったのか！　いやー、納得した。俺って人見知りだから全然知らない奴とかだと困ってたんだよな」

そうやって「よう黒神、人吉！　よろしくな！」と気さくに挨拶する空洞くん。しかし、二人とも戸惑っているのか微妙な返事を返すだけ。

「どうしたのさ二人とも。せっかく空洞くんに会えたんだぜ？　もっと気分を上げようよ」

「なんだよその俺に会うのがレアっていう物言い。俺はいつでも此処にいるぞ」

「空洞くんのその自信は一体何処から湧いてくるの？」

「まあそんなことはどうでもいいんだけどさ」と一旦話を切ってめだかちゃんたちの方に向き直す。

「このデカイ人間が生徒会長の日之影空洞くん。覚えられるんだったら覚えてあげてね。空洞くんってこんな見た目だけど意外とさみしがり屋だから」

「なんか表現が可笑しかったり余計なことが付いてたが、まあ改めてよろしくな」

「よろしくお願いします」

二人揃って軽く頭を下げる。空洞くんが先輩ヅラしてるよ珍しい。いや、普段は後輩に気付いてもらえないだけか。悲しい人生だね。それもあと少しの辛抱だけどね。

というかこんなとこで挨拶しあってる場合じゃないや。空洞くん絶対また壁壊したからその修繕と、空洞くんにやられた生徒の転校か退学かの書類が生徒会に回ってくる。そんなめんどくさいことしたくねーよ。

やっぱり最初の予定通り真黒くんの所に行こうかな。ついでに壁

直して空洞くんにやられた生徒のアフターケアとか。適当に。そうすれば書類も減りそうだし。ま、アフターケアとかぼくのキャラじゃないけどね。

「じゃ、空洞くん。壁はぼくが直しに行くから今回の場所を教えて。生徒のアフターケアもついでにしとくから」

「お前は俺が壁を壊した前提で話を進めるんだな」

「だっていつも壊してるもん。毎回その壁を直してるぼくの気持ちもわかってくれると嬉しいな」

「……努力しよう」

カバンを持って立ち上がる。そういえば何処の壁を壊して誰を倒したのか聞いてないや。

場所と名前を聞いてからドアに手をかける。あ、めだかちゃんと善吉くんどうしよう。まだ座ってるみたいだから帰る気はなさそうだけど。

「めだかちゃんと善吉くんはどうするの？　ぼくはこれから空洞くんがやった後始末をしに行こうと思うんだけど」

「日之影先輩に聞きたいことがあるから私は残るぞ」

「俺は……そうですね。後始末が何か気になるので桜井先輩に着いて行きますよ」

およ？　二人で違う行動とるのか。めだかちゃんが残るんなら善吉くんも残るもんだと思ってたんだけどな。

「そう？　だったら行こーぜ善吉くん。ま、空洞くんはめだかちゃんと交流でも深めといたら？　後で書類叩きつけてあげるけどね」

「桜井お前実は俺が壁壊したこと怒ってんだろ」

「別に、そんなことでぼくが怒るわけないじゃないか。ぼくが怒るわけないじゃないか。大事なことなので二回言いました。じゃ、またね二人とも」

そう言ってドアを開ける。早速めだかちゃんが空洞くんに「壁を壊したとはどういうことですか」と詰問している。いきなりの詰問に空洞くんもタジタジだ。

ま、そんなことはぼくにはカンケーないから気にしないけど。ご愁傷様とだけ言っといてあげるよ。

「それじゃ、日之影先輩、めだかちゃん」と小さく挨拶している善吉くんがいた。もっと大きな声ですればいいのに。

さて、これから空洞くんが暴れた場所に行くわけなんだけど。そう言えば今日って入学式だったよね。ていうことは善吉くんって箱庭学園に来て一日目ってことか。

それじゃあ一つ、先輩らしいことでもしてあげますか。

「移動がてらぼくが学園を案内してあげるよ。どうせ後で走り回ることになるだろうし、今知ってたって損はしないでしょ？　それともこんなアブノーマルな先輩からの案内なんていらないかな？」

「いやいや、先輩がアブノーマルだとか関係ないですから。よろしくお願いします」

「ありがとう。じゃあまずは一階からだね――」

と、いうわけで善吉くんを案内しながら目的地まで歩くこと十分。途中いろんな人に「副会長今帰りー？」とか「今日も生徒会の仕事？」とか「桜井さんちょっと助けてほしいんだけど」とか「ニノちゃん入学初日の一年生ゲットしちゃったのー？」とかいったような声がかけられて移動が遅くなってしまった。まるでめだかちゃんになった気分である。気分だけだけど。

「先輩って随分人気者なんですね。生徒会役員をしていて先輩ほど人望がある人なんて今まで見たことありませんよ」

「ま、めだかちゃんには負けるけどね。彼女が会長になったら支持率九十八パーセント以上確定だからね」

「なんですかやけに具体的なその数字は。まるでめだかちゃんが生徒会長になっているとこを見たことがあるような物言いで」

「だってぼく未来見えるし。とか言ってみたり。ま、信じるかどうかは善吉くんしだいだけどね」

嘘は言ってないんだけどね。ま、普通の人間なら馬鹿にするような言葉だからさ、流されてもいいんだけど。相手が善吉くんだし、

もしかしたら信じるとか言うかもしれないな。ま、別にどっちでもいいけどね。

後ろから着いて来てる善吉くんの方を振り返る。ぼくの表情はたぶんニヤニヤしてるんだろうけど、善吉くんは何やら真剣な顔をしていた。

「……めだかちゃんはあんなのですから、尊敬している人なんて少ないんですよ。信頼はするし仲良くもなるんですけど。そんなめだかちゃんが尊敬するような人の言葉ですから、未来が見えるなんてSFみたいな言葉も俺としては信用に値する言葉だと思うんですよね。つまり信じます」

真っ直ぐな目をした善吉くんの言葉は目と同じくらい真っ直ぐだった。言葉の節は回りくどかったけど。

「感動した。ありがとう善吉くん。近い未来君たちはぼくのことが嫌いになったり恨んだりするかもしれないけど、今だけはどんどん頼ってよ。なんたってぼくは君たちの先輩なんだからさ」

「君たち……？」

ぼくの言い回しを疑問に思った善吉くんが呟いた。まあ、君たちだよね。さっきから見えてるし。

「そう。君たちだよ、善吉くんめだかちゃん」

ぼくがそう言うと善吉くんがバッと振り返った。善吉くんが振り返った先にいる生徒――まあめだかちゃんなんだけど、めだかちゃんがツカツカと近づいて来る。

「私がニノちゃんのことを嫌いになるとか恨むとか、そんなことするわけないだろう。何があっても私はニノちゃんのことが大好きだし尊敬しているぞ」

ぼくの異常がわかるかな？わかったら褒めてあげるよ。（前書き）

「『そういえばニノちゃんの異常って凄いよねー。本当に人間？って感じだよ』」

「禊くんには言われたくないなー。大嘘憑きとか完全にオカルトとかファンタジーの領域じゃん」

「『あはは。そういうのは安心院さんに言ってあげてよ。僕の大嘘憑きは彼女の手の平孵しを元にしてるんだからさ』」

「ま、彼女は存在自体がファンタジーみたいな人間じゃないか。それにぼくの異常はぼくのじゃないからね。ぼく以外の誰かのだよ」

「『神様とか？』」

「さあ？神様なんて信じない方がいいよ。ぼくは神様とか知らないからね」

「『……なんだか神様に会ったことあるような口振りだね』」

「何か言った？」

「『ううん、何も』」

ぼくの異常がわかるかな？わかったら褒めてあげるよ。

善吉くんと同じくらい、いや、もしかしたら善吉くんよりも真っ直ぐな目でぼくに近づいて来る。いやー、光り輝いてるね。やっぱり物語の主人公は格が違うね格が。

「うん、ありがとう。ぼくは君たちのそういう真っ直ぐなところが大好きだよ。だけどめだかちゃんはもう少し他人（ひと）の気持ちを考えた方がいいかな」

「む……わかった、もっと考えよう」

「うん、そうして。って、到着したね」

善吉くんとめだかちゃんと話してたら目的の場所に到着した。

そこは所謂空き教室の一つで、普段は鍵が閉まってる筈なんだけどドアごとぶち抜かれていた。まったく、空洞くんはいつもやり過ぎなんだよね。いちいち校舎壊さなくてもいいだろうに。

中に入るともっと悲惨だった。机や椅子はぐちゃぐちゃになっていて黒板は完全に破壊されてる。壁が貫通してなかったのが唯一の救いかな。

「これはまた……凄まじいですね。どうしてまたこんなことに？」

善吉くんが驚きながらそんなことを聞いてくる。もう空洞くんのこと忘れちゃったのか。知られざる英雄（ミスターアンノウン）があるとはいえ、此処まで清々しく忘れてるとどっちも可哀想になってくるよ。どっちもっていうのは空洞くんと善吉くんのことね。

「善吉、もう忘れたのか。日之影会長がやったのだぞ」

お、めだかちゃんは覚えてたんだ。ま、そりゃね。何もないところで空洞くんのこと思い出せるんだからこれくらいは当然か。未来の話だけど。

善吉くんは「日之影先輩……？　ああ！？　あの人か！」みたいな反応をしていた。ちょっと面白いかも。

「さて、これを直そうと思うんだけどどうしようかな。特に黒板とか」

破壊された黒板の破片を拾いながら言う。能力使えば直せるんだけど、能力はあんまり使いたくないんだよね。能力を出来るだけ使わないのがぼくの主義っていうか。まあ嘘だけど。

「これは……先生に言った方が早いんじゃないですか？」

善吉くんが頭をぽりぽり掻きながらそう言う。

「いやーそれだと大量の書類が生徒会に送り付けられるからさ。校舎の破損とか備品の破損とかは空洞くんの担当なんだけど校舎とか備品の修復発注はぼくの担当なんだよね。そんな書類の処理なんかしたくないし」

備品の種類ごとに処理があるからめんどくさいんだよね。何を何処に何個いつまでに届けるかっていう書類を書くよりは此処で肉体労働した方がいくらかましだし。

「ではとりあえず机と椅子を並べる、使えないやつは捨てる、足りない分を別の空き教室から補充するという方針でいきましょう」

「そーだね。ただ、壊れて使えない椅子や机なんかはぼくのところに持って来てね。ぼくが直しちゃうからさ」

もちろん能力で、だけどね。

めだかちゃんの前で能力とか使っていいのかなーとかいう思考が一瞬頭をよぎったけど、ま、いっか。一度見たくらいで真似されるようなやわな能力じゃないし。

めだかちゃんと善吉くんがガラガラと机と椅子を整理してる間にぼくは黒板の破片を集める。別に集めなくても直せるんだけど、集めた方が簡単だから集めてるだけなんだよね。

えーと、なんだっけ。とある世界の錬金術師たちは理解分解再構築とかするんだっけ。じゃ、ぼくもそれと似たようなことやらせてもらおうかな。

あ、その前に壁も直さなきゃ。空洞くんに後で文句言いに行こう。

ヒビ割れた壁に手を触れる。ま、ぼくの能力が云々かんぬん言ってたけど、基本的に一つのことしかできないんだよね。学園都市の超能力と同じだよ。あとはそれをどう応用するかって話。

何が言いたいかって言うと、ぼくは壁も黒板も椅子も机も直せるってことなんだよね。

というわけで、壁を直しました。ピキピキ鳴りながらヒビが塞がる様は何度見ても不思議だ。ぼくって禊くんみたいに無かったことにしてるわけじゃないし。

さて、と。じゃあ次は黒板かな。破片がフワッと浮いたりしちゃってね。破損した部分に嵌って壁みたいにピキピキ音を起ててくっついた。

ぼくの能力が気になる人とかいるかもしれないけど、そんなのどうだっていいじゃん。結局後で出てくるんだし。大したことなんてしてないよ。

クルッと振り向く。どれだけ進んだかなーという確認のために振り返ったんだけど……

「どうしたの？　そんな鳩が散弾銃喰らったような顔して」

めだかちゃんと善吉くんがこっちを見てぽかーんとしていた。やだなぁそんなに見つめられたら照れるじゃないか。違うか。

「いや……今何をやったのだ？」

めだかちゃんが驚愕の表情で絞り出したような声で聞いてくる。

うーん、詳しく説明してもわかんないよね。だって異常だし。解

析出来ないからのフラスコ計画だし。まあ説明する気なんか最初からないんだけどね。めだかちゃんに真似されたらたまったもんじゃないし。

「言ってもわかんないよ。知りたかったら真黒くんにでも聞いたらいいと思うよ」

真黒くんに全部なすり付けておこう。ゴメンね真黒くん。心の中だけで謝る。実際に謝る気はないけど。

あらかた椅子や机は片付け終わっていたようで壊れた机や椅子は隅に積み上げられていた。仕事が早いね。感心感心。

「桜井先輩終わりましたよ。さっきの現象も気になりますが教えてくれないのであれば真黒さんに聞きますよ」

「ん、ありがと。じゃあぼくは机や椅子を直すけど、君たちはどうする？　善吉くんの興味があることはさっき見せたし、めだかちゃんは何をしに来たのかよくわからないし」

「日之影会長にニノちゃんを手伝ってやれと頼まれたのだ。私もニノちゃんがどうやって直すのか気になったし、こっちに来たというわけだ」

「そうなんだ。空洞くんも自分で来ればいいのに」

「ニノちゃんが怖いから行かない、と言っていたぞ」

ぼくが怖いとか空洞くんチキンか。それでも英雄ですか。まあいいや。空洞くんだし。後で文句言う項目増えただけだし。

「うーん、二人ともここ残るの？　ぼくの直し方見てても全然参考にならないと思うんだけど」

実を言うとぼくの異常をめだかちゃんにあんまり見せたくないだけだったりする。めだかちゃんの異常「完成（ジ・エンド）」でコピられたらたまったもんじゃないしね。善吉くんにならいくらでも見せてあげたんだけど。

でも無理やりめだかちゃんをここから引き離すのもなぁ。不自然だし、別にめだかちゃんのことが嫌いなわけじゃないし。どうしようかなーとか考えてたらいーこと思い付いた。

「そういえばぼくこの後空洞くんにやられた生徒の所に行こうと思ってたんだけどさ、二人で先に行っててくれないかな。たぶん保健室にいると思うからさ」

引き離す理由としては完璧じゃない？　隙なくない？　違うか。

「別に構わないが、それは重要な役目ではないのか？」

「そうですよ、傷付いた先輩のアフターケアとか後輩である俺たちには難しいんじゃないですか？」

二人してそんなこと言って来やがった。あーもうめんどくさいな察してよね。って、まあ当然の意見か。テキトーに答えとこ。

「めだかちゃんは全ての人間を幸せにしたいんでしょ？善吉くんも似たような想いは持ってるはず。そんな君たちだからデリケートな問題を頼むのさ。もちろんぼくも後で行くけどね」

「……そうか、わかった。行こう善吉。ニノちゃんの期待に応えないとな！」

「あ、ああ！　そうだな！」

なんか二人が無駄にやる気を出したみたい。まあ二人がやる気出してくれたらぼくが楽そうだからいいんだけどさ。頑張ってー二人とも。

張り切った感じで教室を出て行く二人を見送った後、机と椅子をちゃっちゃと直した。

ぼくの異常がわかるかな？わかったら褒めてあげるよ。（後書き）

あまりにもタイトルが不評なのでタイトル変えますほんとうにありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7731w/

『異常ー桜井ニノちゃんの憂鬱』

2011年12月12日23時47分発行